
Sky Soul

空島光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S k y S o u l

【Nコード】

N 8 1 8 4 L

【作者名】

空島光

【あらすじ】

戦いに呪われた月族 一人の少女 レイ と龍の物語。
少女は戦いを締結させるために、仲間とともに天空城へと立ち向かう。

仲間とギャグも交えながら、敵ボス、少女 マナ を倒しに行く。

序章

天空城編

登場人物

レイ・ホープ 主人公。十歳の銀髪の少女。月族。

キバ 忍者。十九歳の黒髪の男。ティラといつも行動している。

ティラ ロープを着た子。八歳の金髪の男の子。
ミルト 白い光の龍の子。

レアン 双子。十八歳の金髪の男。目が紅い。
カノン 双子。十八歳の金髪の女。目が紅い。

マナ 天空城のボス。十歳の茶髪の少女。
リム マナの秘書。十七歳の赤毛の女。
ギーム 謎に包まれた男。十七歳。
ヴァッシュ 天空城の新米。十六歳の青髪。

この世界・・・。

フロウテキヤグスル

天空城という名の団体が支配する世界。

ほとんどの人がその団体を支持するが、一部、くらい闇の世界があった。

それは 呪われた月族。

天空城の闇の部分は彼等、月族が何でも知っていた。
だが、希望は絶たれた。

天空城に、月族は滅ぼされた。

呪われた月族の名は、時が経ち人々から忘れ去られていった。
一部をのぞいて

……お前だけが、最後の希望だ。

序章 出会い

一 ミルト

空には夕日が浮かんでいる。

気持ちが悪いくらい、真っ赤だ。

私は高く茂った枯れ草に隠れていた。

辺りは犬の鳴き声がする。

この草原の中にいると私は確実に死ぬ。

私は草原の向こうの森に目をむけた。

森の中に逃げれば、見つけにくくなり犬に噛まれた傷も癒せる。

（私は……まだ、死なない。）

自らにそう言い聞かせた。

静かになった草原の中、私の心臓の鼓動が聞こえる。

不意にパンツという銃声の音が草原に鳴り響いた。

鳥が一斉にバサバサと羽の音を響かせながら飛立った。

パンパンパンと連続で銃声の音が聞こえ、飛んでいた二匹の鳥が悲しく墜落した。

あの弾にはあたってはならない。

龍の血が穢れてしまう。

（あの時はバカだった……。）

私はなぜこうなったのかをゆっくり思い出した。

私が村の隅で村の人々の話を聞いていたときのことだ。

私は村の裏に茂る甘い果実をのんびりと食べていた。

このときは飢えていてしよがなかった。

私は果実を食べながらおろかな人間どもの話を、耳をすまして聞いていた。

「龍の気を感じます。」

白いローブを着た女の人が言った。

私は食べるのをやめ、じっとした。

（きづかれたのか……？）

「龍は高く売れるぞ。そして、戦力にもなる。ゆくのじゃ！賞金稼ぎよ。」

白いひげを長く伸ばした、村長らしき者が杖を振り上げた。

賞金稼ぎは3人いて、一人が中年の男、もう一人が中年の女、もう

一人が年は10くらいの少女だった。

少女には並々ならぬ殺気があった。

中年の男と女よりも秀でている。

白ローブの女は、聖魔導を使って龍の情報を集めた。

「白き龍の子のようです……この世で無敵と呼ばれる光の龍……。あとは不明です。」

「わかったか。レイ。」

中年の女は言った。

「了解です。」

と少女はこたえた。

少女は古稀使われているようだった。

私は静かに思った。

（国の犬……か。哀れだな。）

「いくのじゃ!!」

村長らしき者が言うと言金稼ぎは「はっ。」と言い、音もなく砂煙だけを残して消えた。

私はわれにかえった。

(弾・・・あのいやなにおい・・・あれには触れてはならない。私は同時に恐怖と興奮を感じた。)

これは武者震いではない。

ただの恐怖だ。

(怖い・・・怖い、怖い、怖い!)

その時、私には冷静さが無かった。

頭の中で飛ぶと撃たれることなんて、わかっていたのに。

私は我を忘れ、気がついたときにはもう・・・飛んでいた。

目の前に中年の女が不意に現れた。

中年の女はあの鉛の玉を撃ってきた。

鉛の玉は私の体すれすれに空気を切った。

今度は中年の男が、魔法銃をかまえた。

私は鋭くとがった牙を剥き出し、炎を吐くぞと威嚇した。

・・・しかし実際には吐けなかった。

光属性の魔法なら何でも使えるが、威力がありすぎてこの村を丸焼きにってしまう。

(血はみたくない・・・。)

そしてその一瞬のスキに弾を一発入れられてしまった。

スローの映像を見ているようだった。

「残念だったな。白き龍。」と中年の男が言った。

(これで終わりなのか・・・。)

あたると思った瞬間、地面から不思議な力に引き寄せられた。

(なんだ!?)

不思議な力で、翼が制御不能になった。

ドスンと鈍い音がし、地面にたたきつけられる。

(くっ・・・!)

尻尾にひどい激痛が走る。
尾から血が滴り落ちた。
真っ白な尾は血でくどい桃色に染まっていた。

そして今、ここにいるのだ。ただ広いだけの灰色な草原に。
私は目をつむり、耳を澄ました。
目をつむれば、神経が研ぎ澄まされる。

犬の唸る声がする。

周りに二匹。

中年の男のおいがする。
どうやら飼いならされているようだ。
私は目をかつと目を開いた。

今ならわかる。犬がどのようなステップで自分を殺^やりに来るのか。

（私は、死なない！）

私は最後の力を振り絞った。

私は前につっぱしるように見せかけた。
もちろん、つかまるわけがない。

犬が二匹両脇から、襲いかかってきた。

犬は目が充血し、口からよだれを垂らしている。

狂気の犬だ。飼い主によく似ている。

私はフツと微笑みを浮かべた。

私が左にフェイントをかけると犬どもは左にとんだ。

私は右にステップをふみ、さらにとびかかってきた犬を踏み台にして、空へと舞い上がった。

今の私に弾など、当たらない。

私は一声ほえると森へと急いで向かった。

何分か飛ぶと森に入った。

やっと体が癒せる。

私は草むらに倒れこんだ。

よほど疲れていたのか目をつむると、ぐっすりと寝てしまった。

・・・私は夢を見た。

そこは戦場だった。

血の匂いがする。

大砲やミサイルの音が耳に響く。

私と母は草むらにじっと息を潜めていた。

「ミルト。私のかわいいミルト。ここで待っているのよ。

絶対に動いたり、声を出したりしてはいけない。」

私の母、ユーンは言った。

「母様・・・」

私、ミルトが言った。

ユーンは前方に人間が大勢いるのを感じ取った。

（ミルトは死なせない。天空城の団体は危険だわ。ミルトが利用さ

れてしまう。）

「じっとして待っているのよ。」

ユーンはミルトを優しくなめた。

そして草むらからとび出した。

ミルトは天空城という言葉葉を心に刻んだ。

（復讐してやる・・・。）

ユーンは草むらから飛び出し、ユーンはほえた。

そして、ユーンの声はもうそれから、聞こえなかった。

ミルトは飛び起きた。息が荒くなっている。

（はっ！・・・嫌な夢を見た・・・。）

ミルトは周りを見渡した。人の気配は感じない。

（賞金稼ぎは追いついていないようだな・・・。）

そのとき、後ろからミルトは強烈な殺気を感じた。

（何い・・・？誰かいるのか？）

ミルトは息を殺し、緊張して硬直した。

すると頭の中で声がした。

「残念だけど、君の心は・・・。」

そして振り向くと賞金稼ぎの少女がいた。

ミルトに剣先を突きつけている。

「全てお見通しさ。」

（・・・！！）

二 レイ

ミルトはまだ、動けないでいた。

（殺される・・・。）

少し時間がたつと、少女は言った。

「私に協力するきはない？」

ミルトは静かに少女の話に耳をかたむけた。

「私は呪われた月族。・・・この刺青が証拠。」

少女は巻いているターバンを少しずらして刺青を見せた。

左目の下に淡い水色の雫の形をした刺青が三つ彫つてある。

左が一番大きく、右にいくにつれて小さくなつていく。

「月族は龍と心を通わず。龍の心、見ているもの、考えていること、全てが見える。それを聞いた天空城の団体はすぐ月族狩りにやってきた。龍は戦力になるから。くやしいけど、月族は戦いの渦から、逃げられない。呪いみたいなもの。」

「私の年が七のときだった・・・。」

少女は目を伏せ、悲しそうな表情で語りだした。

三年前

「兄さんどうしたの？」

少女の兄は緊張しているのだろうか、窓の外を見て、固まっていた。

「奴が来た。天空城だ。そこに隠れている。・・・出てくるんじゃないぞ。」

兄の握り締めた拳が震えている。

「怖いものなしの優しい兄さんが、震えている・・・。」

兄は少女の背中を押し、少女を見つけないく隠し扉の裏に隠れさせた。

「絶対、出てくるんじゃないぞ。」と兄は小声で言った。

少女は隠し扉の隙間から部屋の様子をのぞいた。
入り口の扉が開き、誰かが兄を連れて行こうとしている。

兄の両手は紐で硬く結ばれ、この部屋を出て行った。

兄の右目の下にある、私と同じ形をした刺青が、きらりと虚しく光った。

その光は涙だったのだろうか。

私は目をギョツとつむった。

目から大粒の涙がぼろぼろと、絶え間なくこぼれた。

へごめんなさい、兄さん。私は弱いから助けられない。ごめんなさい。。。ㄥ

少し時間がたつと、またドアの開く音がした。

最初は兄さんかと思ったが、兄さんはあんな乱暴な開き方しない。その誰かが入った後、たくさんの人がドタドタと入ってきた。

少女は怖くなって隠し扉が開かないように魔法をかけた。

人間達は何かを探している様子だった。

見つからなかったようで、くやしそうに地団太を踏む奴もいた。

少し時間が経つと、人間達はバタバタと出て行った。

かなり時間がたった。

奴らはこの村から出て行ったようだ。

なにか焦げ臭い匂いがする。

嫌な予感がした。

怖くなって、隠し扉から勢いよく出て行った。

少女は大きく目を見開いた。

外を見たとき震えがとまらなかった。

全てが燃えていた。

私は誰かいないかと必死にさがしたが、誰もいない。

少女はガクリと膝をついた。

頬から最後の涙が零れ落ちる。

そして思った。

「なんて私は弱虫なんだろう。あそこに隠れているより、みんなと一緒に連れて行かれればよかった。」

とても、くやしかった。

そして少女は誓った。

「絶対みんなを助け出しに行くんだ。そして私は……絶対……強くなる！」

「もう、泣かない！」

少女の叫んだ声は誰もいない村に響いて寂しく消えた。

「そして兄さんは帰ってこなかった。今は生きているのかもわからない。でも私は兄さんが、みんなが、生きていると信じている。私は兄さん達を助けに行くんだ。」

そういつて、少女は話をきった。

「もう一度聞こうか。協力しない？」

（……わかった。信じきったわけじゃないけど、一緒に行くよ。でも、私の復讐にも付き合って。）

そう返事をする、少女は小さくガッツポーズをした。

「その返事を待っていたんだ。私の名前は……レイ・ホープ。細かい希望の光」

レイは嬉しそうにいった。

自分の名を言うのに少しためらったがミルトはこたえた。

（私はミルト。……でも、あいつらはどうするの？）

ミルトは賞金稼ぎたちのことを思い出した。

レイは困った顔をしてこたえた。

「……残念だけど、おっさん達は倒さないかね。」

（……残念か？）

さりげなくミルトはつつこんだが、レイはその言葉を見殺して話を続けた。

「その時は隠れてね。ややこしくなるから。」

（ええ。言われなくてもそうしますとも。）

ミルトは木の根っこの小さな穴に隠れた。

何分か経つと賞金稼ぎたちが草むらを揺らして、やって来た。

（噂をすれば・・・だな。）とミルト。

「レイ、なにか見つかったか？」

中年の女が話しかけて来た。

レイは首を振り、背中に下げている剣を手を取った。

「なんのつもりだ、レイ」と中年の男。

レイの顔が無表情になる。

レイは一瞬その場から消え、男の前に移動し、剣で肩を切りつけた。血が空中にはねる。

レイは返り血を避けたが、頬にひとつ、ぽつんと男の返り血がついた。

レイはその血を手でぬぐった。

男は倒れて動かなくなった。

ミルトは恐怖に顔がひきつった。

（一瞬だ・・・。）

「くそ！何だと言うのだ！」

女は舌打ちして弓を三本引き、放った。

三本の矢が弧を描き、空中を切る。

レイは二本よけたが一本は右の頬にかすれた。

頬が摩擦熱でひりひりする。

もう少し右だと、刺さっていたかもしれない。

レイは頬の痛さに耐え、呪文を唱えた。

地面には青い光の筋の魔法陣が浮かび上がった。

古代の言葉が円状に浮かび、それを縁取るように円が描かれている。

ミルトにはよくわからない、月族のものである。

レイは呪文の唱え終わりに小さくボソリと何かをつぶやいた。

（呪文の名称なのだろうか・・・。）

すると辺りがまぶしく光った。

目がつぶれそうだ。

（まぶしい・・・。）

ミルトは思わず目をつむった。

目を開いたとき、そこにいたはずの、目の前の女は消えていた。

（・・・何があったのだろうか。）

レイは剣についた血をぬぐい、鞘におさめ、何も無かったかのように近づいてきた。

レイは空を見上げた。

いつのまにか、夜になっていたようだ。

空にはいくつもの星が散らばり、大きな月是不気味に青白く輝いていた。

「きれいな星空だね。・・・これでまた、兄さんに近づいたかな。」

「そういえば昔、兄さんがこんなこと言っていた。」

「いつでも笑っているよ。」

どういう意味なのかはわからない。

なにが言いたかったのだろうか。

レイにとって、謎めいた言葉だった。

しかし、レイはいつも微笑む努力を重ねた。

ミルトは考えていた。

こんな怖い人間について行っても大丈夫なのだろうかと・・・。

コイツがもしも、邪悪なヤツだったら・・・？

私はどうなる？

死ぬにきまっている。

ミルトの自由はコイツに奪われた。

今、考えていることも全部聞こえているのかもしれない。

ミルトは身震いした。

半信半疑で付き合えば・・・何とかなるかな。

「邪悪なんかじゃないよ。いつでも君の味方さ。たとえ君が敵になってもね。」

とレイは言い、微笑んだ。全部聞こえていたのだ。しかし、その微笑は決して邪悪なものではなかった。

この二人の絆はやがて硬く結ばれた。

三 謎の人

ミルトは疲れのせいかぐつすりと寝ている。

尾にけがをしているのでよく効く薬をぬり、包帯を巻いた。

レイの魔法のせいで地面にたたきつけられ、傷ついた傷だった。

「あの時は、ごめんね。重い傷だけど、君なら三日で治るはず。」

レイはあくびをした。

「君を見ていたら、なんか眠くなってきたよ……。今日はここで野宿だね。」

このまま寝るとさすがに危険なので、レイは強力な結界を張った。これで雑魚敵だけは入れない。上級者の魔導師ならすぐにみやぶられるが、こんなところに来る奴なんていないだろう。

「おやすみ……。」

レイは草むらに寝転がったまま、ぐつすりと寝てしまった。

深夜。

紅月を背景に丘の上に立っている人がいた。

その人はじつとミルトたちのことを見つめていた。

ミルトたちの敵かどうか、わからない。

だが、敵だとしたら襲ってくるはずだった。

その人は黒いフードを深くかぶり黒い衣装につつまれ、死神のようだ。

表情は無表情だった。

紅月の光に天空城の十字架のような紋章がキラリと光った。

謎の人は数分たつと、煙のように消えた。

序章（後書き）

暖かい目で見守ってください。

1章 動き出す者 Part 1（前書き）

- - - - - 目の前には霧に包まれた街があった。

レイはそこでおバカな忍者と少年に出会う。

彼らの目的とは・・・

1章 動き出す者 Part 1

一章 動き出す者

一 マナ

レイとミルトは草原の中、歩いていた。

草原は綺麗な緑色をしていて、まるで緑のじゅうたんのようだった。さわやかな風がレイの銀色の髪をさすって去っていく。

「うん。どうしようか・・・これから・・・。」

天空城 待合室にて

俺を呼び出してボスはなにをするつもりなのだろうか。

もちろん、ボスではなくボスの秘書がくるはずだ。

しばらくすると、ドアが開く音がして、秘書が入ってきた。

「失礼します。」

秘書は眼鏡をかけなおし、右腕にかかえたノートを手に取り、要件をいった。

「ボスのご命令です。龍が一匹見つかったようです。名はミルト。

白き光の龍の子です。龍騎士の鎧をきれば、龍は味方と勘違いするはずです。ヴァッシュさんよろしくお願いします。現在、ユーマロ草原にいるようです。しかし人間が一人くっついていようですね。」

「俺じゃなきゃいけないのか・・・。」

ヴァッシュはボソリとつぶやいた。

「どうかしましたか？」

「なっ・・・なんでもないです。」

秘書はこれでも剣の使い手らしい。この前一人兵士が逆らって殺されたらしい。

身の凍る話だ。少しでも逆らえばあの世行きだ。できればこんな所から抜け出し、友と遊びたい。

「了解しました。今、向かいます。」
ヴァッシュはこの部屋からでて、向かいの部屋に入った。
太陽の光を一番浴びる大きな部屋だ。この部屋はがらんと置いて
家具もなにもない。たったひとつ大きな扉があるだけだ。
扉はギギギと音をたてて、開いた。
冷たい風が部屋に入り込んできた。
もはや地面は見えず、どこかしこも雲だらけである。
扉からヴァッシュは落ちた。
龍騎士の翼を広げ、飛び立った。

ユーマロ草原

「ミルト・・・町に行ったら龍狩りがまた始まっちゃうよね・・・。
クリスタルタワーの人達なら、龍を大切にしてくれるんだけど・・・。
遠いなあ・・・。」

レイは目の前の町を眺めた。

「町で情報収集したいけど・・・。んー残念・・・。」

ミルトが「それなら・・・。」と言いかけたとき二人は人の気配を感じて、立ち止まった。

レイは急いで刺青をターバンで隠した。見られたら大変な事になる。
上から感じる・・・。

親しい龍の匂いがするが、敵だ。

レイとミルトは上をじつと見上げた・・・何もいない。

だがここでその主にスキをとられたら・・・死ぬかもしれない。

（レイには負けるがまああの殺気だ。レイ、注意して。）

へわかった。」

ヴァッシュはかなり緊張していた。

「コイツを殺すのはいやだ・・・だから・・・人間を団に入れて龍
は俺がなつかせよう。だが・・・そんな簡単にいくものだろうか・・・。
」

レイはじっとしていた。

不意に上から声がした。

「天空城に入らないか？そうしたら、命は助けてやろう。」

その声の主は空の中、……カモフラージュされている。

目を細めてよく見ると……空がゆがんでいるようだ。

……人間の形に。

レイはフフ……と笑った。

「いいのか！」

ヴァッシュは嬉しそうに言った。

そしてレイは笑顔でいった。

「無理さ……。」

レイはポケットから銃を取り出してゆがんだ空に、一発撃った。

銃声のはじけるように鳴った。

人が鳥のように、落ちてきた。

起き上がるうとする前に、レイは剣を突きつけた。

「さあ！天空城の場所を吐きなさい。」

ヴァッシュはレイの足を蹴り、レイを転ばせた。

するとレイのターバンがほどけてしまった。

ヴァッシュは大きく目を見開いた。

「くそ……！刺青の印を見られてしまった。こいつ……生きて返さない。」

レイの目が銀色にキラリと光った。

「お、お前は……！」とヴァッシュ

へこ、こいつは……呪われた月族……

ヴァッシュはレイに剣を突きつけた。

ヴァッシュは息を切らしている。

そこにミルトが突進をかました。するとヤツは吹っ飛んだ。

地面にぶつかる時、鈍い音がした。

ヴァッシュは悲鳴をあげた。

「……痛そう。」

そして、ヴァッシュはすばやく立ち上がった。

ヴァッシュは龍の翼を広げ、真つ青な髪をたなびかせ去っていった。
「命はないと思え。」ヴァッシュはそういい残して、空へと飛立った。

「逃がしたか……。ミルト！ここから逃げるよ。町を通らなきゃいけないけど……。」

とレイが言いかけた時、ミルトは首を振った。

（もつといい案がある。）

ミルトの指す方向に、草原に生えている草をのんびりと食べている1匹の馬がいた。

「この馬……。でかい！！」

毛並みはサラサラの真つ黒な馬だ。

鞍が取り付けてある……。誰かの馬なのだ。

「かわいそうだけど、乗らせてもらうよ。」

レイは周りを見渡して、馬に飛び乗った。

飛び乗ると馬にスイッチが入ったように、馬が暴れだした。

「ミルト！バックに入って！」

ミルトはバックに入り込み、すっぽりとおさまった。

レイは馬にしっかりつかまった。

今じゃ動くこともできない。

馬は助けを求めるように鳴いた。

とにかく暴れまわっている。

大きな鳴き声にきづいたのか、ナイフを持ったおじさんがこっちに猛烈な勢いで走ってくる。

……。その走る様子はまるで魔物だ。

（おお！すごい殺気を感じる！レイ以上ある！）とミルト

「のんきな事いわないで。」とレイ

「ドロボ

」！

「ひい！・・・ば、化け物おお

。」とレイ

馬も恐怖したのか、すごい速さで逃げ始めた。

その馬の逃げる速さはとんでもなかった。

どれだけ飼い主が嫌いなのかよくわかる。

「は、早すぎるううう。。」

風が痛いくらい速い。とにかく速い。

少し経つとこの速さが快感になってきた。

後ろを見ると「化け物」は遠く、蟻のように小さくなっていた。

逃げ切れたようだ。

「息ぴったりだね！」とレイは馬の首を優しくなでた。

そして馬は嬉しそうに鼻を鳴らした。

天空城 戦闘指示室にて

「すみません。つかまえられませんでした。人間は・・・全滅したはずの月族でした。」ヴァッシュは床に頭をつけながら話した。

「役立たず・・・ですね。ボスをしっかりと守りしてください！」

よっぽどボスのことを思っているのだろうか、すごい怒りだ。

秘書は咳払いをしてまた、話し始めた。

「今度は失敗しないしないでください。十数人兵士をつけますので・

・・・。」今度は静かに言った。

「ありがとうございます！了解しました！」

ヴァッシュは丁寧におじぎをして小走りで部屋から出て行った。

天空城 頂上にて

「ボス」マナは頂上から地面を見下ろすのが好きだった。

マナはまだ幼く十歳で、ボスの役目をするのはまだ早い。

今はいいように利用されているのだ。

ここにいれば、だれも邪魔なんかしてこない。

今もこうしてのんびりと景色を眺めている。

すると、後ろの扉が不意に開いた。

「だっ、誰だ！」

「わたくしです。失礼します。」

秘書、^{（ハリム）}が扉から入ってきた。

「な、なんだ、おまえか……。てつきり敵が乗り込んできたのかと・
・・」

マナが言い終わらないうちにリムが早々と話し始めた。

「月族の人間が

龍は
。」

マナはぼんやりとしていてリムの話なんて耳に入らなかった。

私にとって意味の無い話だろう。これは単なる儀式にすぎないのだ。
風が優しく頬を撫でて行った。

「・・・月族か。それにしても、眠いなあ・・・。」

マナは思わずあくびをしてしまった。

「ボス！聞いているのですか？あなたの命に関わることです！」

「す、すみません・・・。」

「なんだよ、コイツ。いつも私のことばかり、しかる。怖い。」

遠くの山は色が薄く、近くなるにつれて色は濃く深くなる。

マナはそのまま山の景色を眺めていた。

「
私はこのまま人形にいるしかないのか。・・・それ
とも・・・。」

マナは遙か遠くの虚空を見つめて思った。

二 遭遇

ユーマロ草原をこえ、ひとつの山をこえた。

そして、ここにやってきた。

「何なの・・・この町・・・。」

レイの目の前には霧がかかった町があった。

しかし、人の気がしない、生きていない町だった。

馬は乗っていてわかるほど震えていた。

レイは馬から降りて優しく首を撫でた。

すると、馬の振るえはだんだんと消えていった。

「大丈夫・・・？（ライトニング）？」レイが馬を撫でながら言う。

（ビミョーだな・・・その名前。）

「いいの！ライトニングなの！」とレイは言い切った。

（それよりもさ、レイ・・・ここ、かなりヤバイと思う。）

「ええ。でも、ここを越えないと私は弱いまま。」

レイはそのまま、ゆっくりした足取りで霧の中へ入っていった。

一歩先もあまり見えない。人の呻き声が聞こえるような気がするが、気のせいだろう。

そしてけっこう歩いた。不意に前から声がした。

「ここには来ないほうがいい。深く空気を吸うと気が持っていけるぞ。」

マスクをかぶったようなこもる声が聞こえる。しかしこの声はレイのように幼い子の声だ。

「だれ……?」

もう少し声の近くに行ってみると、レイより幼い子がちょこんと立っていた。

金髪で耳の前は黒く染めてある。

無地のローブを着て、襟を口までのばして空気を吸わないようにしている。

金髪の男の子はゴーグルをはずしてもごもごといった。

「もうすでに遅いか……、お前らには呪いがかかってしまった。」

目の前がぼんやりしてきた……男の子が上下に揺れている。自分が揺れているのか……?

気が失われようとする前に、目の前に火花が散った。レイはそのまま地面に倒れこんだ。

「むぐ……。」頭が割れるよう

に痛い。

後ろから殴られたようだ。

かろうじて目は開くようだ。

「ま……まぶしい。」

レイの視界の端にヒラヒラするものが目に入った。

さっきの男の子のローブだろうか。

「あっ！兄さん起きましたよ！よかったあ。」明るい声が聞こえる。目の前がはつきりしてきた。

それとともに、ミルトとライトニングのことも思い出した。レイは急に起き上がった。

「ミ……ミルトは!?!」

「はあ？ミルト？あの馬のことか？外で暴走している。亡霊に憑か

れたようだ……。もう呪いを解くしかない……」

忍装束を着て、特大手裏剣を背負った黒髪の男が言った。レイより年上のような。額には、はちまきが巻かれている。

「ラッキー……。ミルトの存在に気づいてないのか。」
レイの枕元においてあるバックにそつと手をのせてみる。

「ミルト……。」

レイは心の中から呼んでみた。すると、すぐに返事が返ってきた。

（あ……。レイ、起きたのか……。良かった。それより、その男の話を聞いたほうがいい。ライト……。ニング???が心配なら）

「すまんが、一緒に呪いを解いてくれるか？儀式が必要なんだ。」

「私の旅にあの馬は必要なんだ。手伝うよ。私はレイ。」

レイは手を差し出した。

「俺はキバ。」と装束の男。

「僕はティラ。」と男の子。

二人はレイの手を握った。

「さっき殴ったのは俺だ。すまん。でも、亡霊に憑かれるより……」

「キバが最後の言葉を言う前に顔にレイの握り拳が飛んできた。」

「これで、あいこだ。しかも、力加減考えろ。」とレイ。

ティラは口の中でつぶやいた。

「おお……。怖い、怖い……。くわばら、くわばら……。」

三 隕石と災難

「まず、この村のことを話そう。」キバがゆっくりと話をし始めた。

「この町は夕方が過ぎ、暗くなり始めたとき、霧が出てくる。その霧は町に入った人たちを閉じ込めるんだ。しかも、霧を吸うと何でも凶暴化する・・・狂うんだよ。」

で、ここからが大切だ。この町の東には都に続く洞窟がある。入り組んだ洞窟だから、はぐれないように。間違えて山頂に行くんじゃないぞ、あそこに行つて帰ってきた奴は一人もない！！そして、その洞窟を越えると水銀の泉に出る。ちなみに水銀の泉は水銀でできてない。・・・たぶん。あとは行ってみれば分かる。」

話し終わるとティラが口をはさんだ。

「もう、夕方だから、明日を待とう。」

沈黙。空気が悪い。

すると、キバが口を開いた。

「お前・・・何か、隠しているだろう。話してみろ・・・。」キバとティラが真剣なまなざしでこちらを見てくる。

「ど、どうする・・・ミルト？」

（いいんじゃない？・・・けど条件付きだね。このことを誰にも言わないって条件。と・・・旅の道ずれとなつてもらう条件。）

「わかった。・・・言ってみる。ミルトの事と私の事。」

レイは重い口を開いた。話そうとしたがかすれた声しかでない。

レイは咳払いして話始めた。

「唐突に言おう。私は月族。しかも龍がいる。」

キバ達の答えは意外とあつけなかった。

「いいよ。僕たちも闇に生きる者さ。ね、兄さん。」とティラ。

キバは子供のようにコックリとうなずいた。

その様子からキバの方は少々ビビッたようだ。

「呪いを解くかわりに・・・道連れになつてくれないかな。仲間がいるんだ。」

そして、この答えも逆にあつけない。

「それは、無理だ。」とキバ。

「そう・・・残念。」

沈黙。空気がもつと悪い。霧の威力より強いかもしれない。

レイはバツクからミルトを抱き上げた。ぐっすりと寝ている。安心していいのか、とてもいい表情をしている。

「かわいいね・・・。」とティラがミルトに触れようとした。そのとたんに、ミルトの目がぱちりと開き、唸り始めた。

「あ、あぶない！」

レイは急いでティラの手を払った。

「ごめん・・・。」とレイ。

ティラは少しがっかりしたようだった。

「月族にしか心を開かないんだよね。」

ミルトはまた、スウスウと寝息を立て始めた。

もつと空気悪くなった！。

そのとき、キバが立ち上がった。

「俺、飯作るわ。」

「よ、よかったあ・・・。キバ、ナイス！」

飯という言葉に反応して、ミルトがぴよこんと起き上がった。目をきらきらと輝かせている。

「ねえ、レイさん。」ティラがいきなり、話しかけてきた。

「何？」

「僕と兄さんは本当の兄弟じゃないんだ。僕はずっと、ずっと北の果ての工場で古稀使われていた。毎日、毎日意味のわからないものを造らせられた。兄さんは、僕を、そのみんなを助けたんだ・・・。今は僕と兄さんでこういう、活動をしているのさ。ぼくも強くなるために。」

「そっか。」

レイはぽつりと思った。

「私と一緒になのか。」

少し時間が経つと、部屋の中にはおいしそうな、香ばしい匂いが漂

っていた。

「みんなー飯だぞー。」

向こうの部屋から、キバが呼んでいる。

ミルトは一瞬にして、この部屋から消えた。

「お腹すいたー。」

テーブルには魔物のようにでかい、焼き魚が載っていた。テーブルからはみ出ている。白い湯気が立ち上っていて、とてもおいしそうだった。

「いただきま す！」

4人は勢いよく食べ始めた。

レイは一口食べると、手を止めた。

口の中になんとも言えないまずさがゆつくりと、広がった。

「キバ、・・・これ・・・焼いた魔物！？・・・まずい！」

キバは手を止めた。

「これが、野生の世界だ。この魔物は魚みたいだが、違う。俺は」

魚太郎 〽と呼んでいる。」

「・・・な、なんとも名前があ 。。 しかも、野生の世

界って・・・ 〽とレイは思った。

（何言っているの？レイ、お前のライトニングという〽 名付けセンス 〽と同じではないか。・・・しかし、野生の世界というのはよくわからない。）とすかさずミルトが、心の中でつつこんだ。

結局、体がもたないのでレイは、魔物を渋々食べた。

そうしてこの明るい食事は終わり、明日に備えて寝ることになった。食事した部屋をミルト達、そのとなりの部屋をキバ達が使うことになった。

「おやすみ・・・ミルト。」

レイはそういふといびきをたてて寝てしまった。

（早！）

朝。

レイは目を開けた。牙、ティラ、ミルトが私を見下ろしている。

「むう。まぶしい……。」とレイ

「起きろ、もう行くぞ。」とキバ。

「わかったよ……。」

レイはむっくりと起き上がるとバックを背負った。

ティラがびっくりした顔をした。

「レイさんは武装したまま、ねるのですか!？」

「うん……。何がおこつてもいいようにね。」と冷たい水で顔を洗いつつ言った。

「僕も今度から、そうする。」とティラがつぶやいた。

「いくぞ。」

キバが扉を開けるとにぎやかな町の光景が見えた。

野菜を売り出す人、おばさんの立ち話、げんきに遊ぶ子供達……。

この人たちも、夕方になると亡霊に体を乗っ取られてしまうのか。

そう思いながらもレイたちは町を出た。

町を出ると、目の前にはすぐ洞窟があった。

この洞窟は山の入り口のようなだった。

レイがそんなことをぼんやり考えていると、キバとティラがいなくなっていた。

「行こうか、ミルト。」

洞窟に入ってみると、いきなり別れ道だった。

「ここはあえて、横穴に入ろうか。」

レイは身をかがめ、横穴に入っていた。横穴はとってもじめめしているが、クリスタルの光に照らされて、明るい。

レイは横穴をでて、あたりをぐるりと見渡した。

「誰も、いない。」

すると後ろからカツカツという、足音が聞こえてきた。

「キバ……? ティラ……?」

前に・・・あいつらがいる。

前のように、逃げるわけにはいけない。今回は龍の匂いはすべておとしたし、顔が解からないように、兜を装備した。

すこし人影がみえると、人間と龍に話しかけた。

「あのーすみません。道に迷ったのですが、ご一緒してもいいですか？」とヴァツシュは言った。

レイはいそいで龍をバックにいった。

「あ、大丈夫です、隠さなくても。」

チツとレイは舌打ちすると、笑顔で振り向いた。

「いいですよ。」とレイ

「・・・わかりますよ。僕はこれでも龍騎士。だから、すぐになれますよー。」

ヴァツシュはかがんで手をたたき、「おいで。」と声をかけた。

ミルトはこの人が嫌だった。

嫌な感じ・・・。じりじりと近づいてくる、嫌な感じ・・・。

ミルトはレイの後ろに隠れ、眉間にしわを寄せて唸り始めた。

レイはよしよしと、ミルトをなだめた。

「本当は、なつくはず・・・なんだけど。」と、ヴァツシュは立ち上がった。

これはヴァツシュの本音だった。本当はミルトを手なずけて、さっさと帰りたいかった。しかし、無理らしい。

「じゃあ、行こうか。」レイはニツと笑って歩き出した。

ヴァツシュは立ち止まり、考えた。

このままじゃ、やばい・・・。

レイはその様子をみて、首をかしげた。

「どうしたの・・・？はやくキバ達と出口で合流することになっているから。もう二人はついていていると思うよ。」

「キバって……。」

ヴァッシュはもつと考え込んでしまった。

ヴァッシュは内心とてもびっくりしていた。

思い出した！

あの日のことを……。

僕とキバは幼馴染で、一番仲がいい親友だった。

でも、僕はもう、縁を切ったんだ。

ヴァッシュは白黒の画面で思い出をみているようだった。

ヴァッシュとキバは二人で木を積み上げて作った、秘密基地でよく遊んでいた。

9 歳ぐらいのときだった。

キバは12だっけ。……。

「気が狂ったか！ 天空城に入隊する？ お前はそんな奴じゃなかったはずだ。」とキバ

ヴァッシュは暗い顔をして、じつと地面をにらみつけていた。目には涙がたまっていた。ヴァッシュは無理やり入れられたことを言わなかった。もし、言っていたらキバは命にかえてまで自分を助けに来るからだ。だから何もいえなかった。ヴァッシュの目から大粒の涙がこぼれた。ヴァッシュは何も言わずに駆け出した。

もうキバとは、親友として会えない。

敵として、会うのだ。

「バカヤロ

」キバの声が遠くから聞こえた。それでも僕は、

走り続けた。

こんなだったなあー。キバ、元気かな。どんな人になっ
っているかな。

「おい。いくよ？」レイの掛け声でヴァッシュは我に返った。

「うん。行く。」とヴァッシュは駆け出した。敵として会うとして
も早く会いたいと思った。

そのころ、キバ達はクリスタルの光もない真つ暗な横穴
を進んでいた。

「これが一番近道だ……。レイ達を洞窟の出口で待っていよう。」
洞窟の中がだんだん明るくなっていた。

「兄さんもう、出口ですね。」

「ああ。」

その頃レイ達は出口ではなく、山頂に進んでいた。

ミルトはレイに話しかけた。

（この横穴・・・風が吹いている。・・・行ってみる？）

レイは横穴に入ってみた。顔に強い風があたる。

「本当だ……。行ってみよう。」とレイ。

ヴァッシュは、どんどん突き進んでいく一人と一匹に振り回されて
いた。

だから、バテ気味である。

身をかがめて横穴に入ると、すぐに光が見えてきた。

「まぶしい……。」

あまりのまぶしさに、二人と一匹は目を細めた。

その頃キバ達は、出口で待っていた。

「遅い……。遅すぎる！」とキバは右往左往していららしていた。

「兄さん、何かあったのかもしれませんが。もしかしたら、山頂に進んでしまっているのでは？」とティラが言った。
「めんどろだが・・・行くぞ。」

レイ達は山頂にたどり着いてしまった。

レイ達が立っている場所は一言で言い表すと、
「光の神殿」に続く階段だった。

真っ白な階段と黄金に輝く神殿は空中に浮いている。幻想的な景色だった。

「すごい。ミルト、綺麗だね。先に進んでみる？」とレイ
「・・・うん。」

レイは何百段もある階段を上り始めた。

「そつえば、さつきからミルトの調子が変わ・・・。」とレイは思った。

何十分か経つと神殿の扉の前まで来ていた。

近くで見ると、豆粒ほどだった扉はレイの背丈の三倍ほどあった。

レイとミルトが開けようとしても、びくもしない。

その時、影の薄いヴァッシュが「ここは僕に任せてください。」と言った。

ヴァッシュは少し下がると、扉に突進した。すると、扉のド真ん中に人が通れるほどの穴があいた。

「意外ともろい素材で出来ているみたい。」とレイは扉の破片を触りながら言った。

神殿の中はとても神秘的だった。

神殿のステンドグラスがきらきらと輝き、神殿は黄金の光に満ちていた。

神殿の両端の柱はレイの背丈の五倍ほどある。

その柱のてっぺんに彫刻の龍が一匹ずつ乗っていた。

レイは目を細めて、二匹の彫刻の龍をじいつと見た。

頭にはミルトと同じ、太陽の形に似た光の紋章が描かれていた。

「もしかしてミルト、ここは君を祭る神殿なのかもしれないよ？」とレイ。

「かもしれない……。というより、そうだと思う。この光の紋章は、光の龍の証拠、誇りだから。」とミルト。

レイはまた、じいつと彫刻の龍を見つめた。

レイは彫刻の龍を指で指した。

「あの彫刻、今にも動き出しそうだね。」とレイが言ったとたんに、彫刻の龍の目がレイの方にギロリと向いた。

「ひい。」とレイは言つと、剣を構えた。

ミルトはいつもと違い、無表情だった。ミルトの琥珀色の目が黄金に輝き始めた。

「剣をおろして、そこで待っていて。」と言つとミルトはゆっくりとした足取りで両端の柱を通つた。彫刻の龍の目がミルトに注がれる。

ミルトが呪文をブツブツ唱え始めると神殿の黄金の光がより、濃くなつていった。

ヴァッシュとレイはその様子を静かに見守つた。

少し時間が経つと神殿の天窓から小さな物体がゆっくりと落ちてきた。

よく見ると、鍵のような形をしている。

その鍵が大理石で出来た床に音もなく落ちた。

そのとたんに、彫刻の龍、2匹がしゃべりはじめた。

「小さき光の龍よ、その鍵を取り、我等を倒さん。」

ミルトは鍵の鎖をくわえて、自分の首にかけた。

「……やりますよ。」とミルト。

「私もやる！」とレイは鞘から剣を抜いた。

ヴァッシュは空気に戦わなければいけないので、背中に背負つたトライデント（三叉の槍）を手に取つた。

「やるしかないのか・・・。」とヴァツシュ

彫刻の龍の足元にヒビがはいった。

足元の爪をよく見ると紅く染まっていた。

もしかしたら彫刻の龍によって、命を落とした人達がたくさんいるのかもしれない。

「うーん。ぞくぞくしてきた。」とレイは言い、呪文を唱え始めた。それを守るようにヴァツシュが前に出る。ミルトは床を蹴って、空中に飛び上がった。

（この鍵・・・みるみる力が湧いてくる・・・！）とミルト。

彫刻の龍は重い翼を持ち上げ、羽ばたき、大理石の床にドーンと落ちてきた。

そのとたん、レイは二匹の彫刻の龍に指を指し「hell light（地獄の光）」と唱え、指から真つ赤な光を放った。

彫刻の龍の首にヒビがはいった。

ミルトは口からそのヒビの割れ目に光の弾を放った。光の弾は割れ目にすっぽりと入り込んだ。首の割れ目から一筋の光、二筋、三筋・・・とどんどん増えていき、光の弾は爆発した。

石の破片が四方八方に吹っ飛んだ。

ミルトはそれをひらりと避けた。

「よし。一匹倒した。」とレイがガッツポーズをした。

もう一匹がすばやく前に躍り出ると、重い尾をレイの腹にたたきつけた。

レイはそのまま吹き飛び、壁に激突した。レイがあまりの痛さに唸ると、口の端から血が垂れた。目の前がちかちかして、動こうとすると背中と腹に激痛がはしる。

（レイ、動かないで。）とミルトが後ろを向いていった。

レイはコックリとうなずくと、うつろな目で呪文を唱えた。

「darkness meteorite!!!!（闇の隕石）」と

レイは空を指差し唱え終わった。

空から轟音がし、どんどん近づいてくる。

「ちよっ！ヤバイ！出るぞ！」とヴァッシュはレイを担いで外へ出た。

ミルトもそれに続いて外に出た。

空を見ると闇色に染まった隕石が三つゆっくりと落ちてくる。

ヴァッシュは階段を急いで駆け下りる。

少し経つと、後ろから耳の鼓膜が破れそうな音が聞こえた。

ヴァッシュが階段の下りる速さをゆるめて、神殿の方を向いてみた。神殿は跡形も無く崩れ去っていた。

じつと立ち止まって見ていると、空中に浮いている階段がぼろぼろと落ち始めた。

「ヤバイ」とヴァッシュはつぶやき、我に返って転がるように駆け下りた。

階段はヴァッシュ達を追うように落ちていく。

最後の五段くらいの時、目の前に忍者の格好をした男とローブを着た男の子が出てきた。

ヴァッシュは、はっとした。

キバだ。

ヴァッシュは踏み外し、気持ちのいいほど綺麗に転んでしまった。そしてそのままゴロゴロと大玉のように転がっていく形になった。

キバは目を見開いた。

とつても大きな、人と龍と石の破片がごろごろとこっちに向かって落ちてくる。

「に・・・兄さん！」とティラがキバに手を伸ばす。

「んぎゃあ！」とキバは変な裏返った奇声をあげて人の塊につぶされた。

「・・・・・・・・・・」

キバはうつ伏せに倒れ、その上にティラが乗っかり、その上に目を

回したヴァツシュが倒れ、一番上にすっかり回復したレイが「足を組んで」座っている。

その上に空を、嬉しそうにミルトが空を飛び回っている。

「ああ。極楽！いい景色だね。ミルト！」とレイ
ミルトは嬉しそうにうなずいた。

キバの「んぎゃあ」という奇声が「やまびこ」となって響いた。
「んぎゃあ．．．んぎゃあ．．．んぎゃあ．．．」

そのやまびこはレイとミルトの爆笑にかき消された。

この後、キバが笑い者にされるのは．．．言うまでも無い。

四 親友

ヴァツシュはキバを目の前に、衝動的に体が動いていた。
前にいるのは親友のキバだ。

キバは僕のこと、まったく知らない人だと思っている。

兜をとったら、月族の奴に正体がばれるなんてわかっていた。

そして十数人の兵士のこともすっかり忘れていた。

「キバさん．．．。いや．．．キバ。僕のこと覚えているか。」

ヴァツシュは兜を脱いだ。キバは目を大きく見開いた。そして、レイ達は印象的な真つ青な髪を見て、驚いた。

「お．．．お前は．．．。」とキバ

「お、お前　　！」とレイ

「誰さか．．．？」とティラ

唯一、ティラだけが状況を把握できていない。

その時、洞窟の中から五人の兵士が現れた。

「月族の、おとなしくするんだな。」と剣を抜いた兵士が近づいてきた。

「ちっ。はめられた。」とレイは舌打ちした。

レイはミルトに心の中で話しかけた。

「三人乗せて、空を飛べる？」

（無理に決まっているが、・・・やってみよう。）とミルト

放心状態のキバ、状況を把握できていないティラを無理やり乗せて、さらにレイも乗った。

ヴァッシュは遠い目で、俺、俺のを見ていた。

俺のこと、どう思っているんだろう。きつと俺のことが憎いのだろう。また一緒に遊びたいが。とキバ。

キバは遠い目で、僕、僕のことを見ていた。

僕のこと、どう思っているんだろう。きつと僕のことを憎いのかな。また一緒に遊びたいけど。とヴァッシュ。

レイがミルトに乗ると、当たり前のように、下へ下へと落ちていった。

「ギャ。。」とレイとティラが叫んだ。

下を見ながらミルトは風船のようなものを口から出した。

（これで、助かる・・・はず。）とミルト

「はずってなんなんだ。。」とレイ

風船のようなものが地面をはじいて、ミルト達を優しく持ち上げると、風船はシャボン玉のように破裂してしまった。

「やばい、このままだと骨折する。」

そのとき、運がいいことにライトニングが駆けてきた。

三人はきれいにライトニングにまたがった。

ライトニングはかなり大型の馬だから、落馬することもない。

「ありがとう。」とレイはライトニングの首を撫でてやった。

昼だから呪いも解けているのだろう。

ライトニングはうれしそうに鼻を鳴らした。

「でも、これだと水銀の泉には近づけない……。もう兵士に抑えられているでしょ。」とレイはキバを見て言った。

「……。ティラ、俺は決めた。」とキバ。

「何を、ですか。」とティラ。

「俺らもこいつらの旅に同行することになりそうだ。」とキバはヴァッシュのことを思ってた。

あいつ、……。ヴァッシュのところまで たどり着いてみせる。とキバは拳を握り締めた。

1章 動き出す者 Part 2

五 化ける町

遠回りして来た町はとても洋風でかなりおしゃれな町だった。

床は赤いレンガを敷き詰められてできている。

家が立ち並ぶ商店街はとてもにぎやかで、どこも赤白の旗がたっている。

赤白赤白赤白赤白赤白赤白赤白赤白赤白赤白赤白赤白。

目が回りそうだった。

クロワッサンを焼くバターのいい香り、スコーンの香ばしい香り、紅茶の香り、どれも全部おなかを刺激する香りだった。だからミルトが入っているバツクは、もそもぞ動いて落ち着きがない。どれにしてもレイ達には買うことができない。

お金が……ないから……だった。

レイのお腹がググググ……と静かに鳴った。

レイはおなかを押さえて言った。

「ねえ、キバこのままじゃ私達持たない……。」とレイ

「うん、そうみたいだ。ティラに宿の予約は頼んどいた。ライトニングもそこにつないでおいた。」とキバ。キバが指さす方に、手を振っているティラがいた。おなかのすいている様子は見れず、元氣そうだった。

「子供はいいなあ。」とレイ。

「いや、あんたも子供だろ。」とキバはつつこんだ。

が、キバもおなかですいているらしくツツコミの力がない。

「キバがこの町にいると変だね。」

「なぜだ。」

「服が和服だし、……変だから。」

「誉めているのか？」と、キバは左手に握りこぶしをつくった。

レイは横にぶんぶんと首を振った。レイは純粹に質問に答えただけだった。

「誉めてないよ。」

「俺は、これでいい。」と、最後にキバは開き直った。

レイは突然、足を止めた。

「キバ、賭けてみようか。」とレイ

レイが見るほうには、怪しく光るとにかく怪しい店があった。看板には（賭ける店）という適当な名前がつけてある。

そして無駄にピカピカと光っている。

レイはポケットに手をつ突っ込んで、コインを取り出した。

コインはキラリと光り、レイはにやりと笑う。

「子供はいけない。」とキバ。

「今はもう、毎日いけないこと、してるじゃないかあ。」

たしかにレイの言う通り、龍を持ち歩いている。

「……。」キバは何も言えなくなってしまった。テイラだったらしい返せたかもしれないが、キバは少々、頭が悪い。要するにキバは筋肉バカと言われても、文句が言えない。

少々反抗してみたが、レイに足蹴りをくらわせられ、結局、怪しい店に行く事になった。

さっそく入ると、金髪で笑った目のキバくらいのお兄さんが、レイに話しかけてきた。

「こ・ん・に・ち・は。お嬢さん、君の腕を見込んでの、お・い・しい話があるんだけど……。」

「どんな話？」気持ち悪い奴と思いつつ、レイは言った。

「いいだろう。聞いてやる。」とキバ

「ちよつと外へ。」と怪しいお兄さんが言った。

分厚い扉が開くと眩しい光が入ってくる。レイはまぶしさに目を細めた。

「で、話なんだけど。俺、警察なんだなあ。ちなみに俺の名はレアン。」

レアンがポケットから警察の紋章を取り出した。

（ヤバイ感じ？）とレイはひっそりと思った。

「話はね、この町だと、とくても有名なハ、怪盗カノン。ハちゃんについてなんだ。ミッションクリアすると、一生暮らしていける金がもらえる。ハ、役者。ハとして、協力してくれないかい。」

レアンは顔の前で両手を合わせて「お願いだ」と言った。

「面白そう……。ねえキバ、お金もらえるらしいし、やってみよう。」とレイ

「ああ。いいかもしれん。」とキバ

レアンは「よし」と言ってポケットからくちやくちやの紙を出した。

「じゃあ証明として、お名前を書いてもらいます。」とレアン

レイとキバは顔を見合わせ、決心したように　うなずいた。

レイは左手に羽ペンを持つと　ハ　ソウ・エマナ　ハと書いた。

反対から読むと、名前ウソである。レイは「我ながらいいネーミングだ」と心の中でつぶやいた。

（おお。レイにしては考えたな。でもすぐ、ばれそうだぞ……。）とミルト

キバは右手に筆と墨汁を持つと、力強く、かつこよく、ハ　魚太郎　ハと書いた。

（……。レイ……。）とミルト

レイはキバにテレパシーを送りたかった。実際には龍にしか送れないが……。

ハ魚太郎はないでしょ！　どれだけ魚太郎好きなの！？　でも、墨汁じや取り返しつかないし……。ハ

レイの心の叫びは虚空へと、消え去った。

ミルトもそれに同感したようだ。キバの「名づけセンス」は
レイよりレベルが低いようだ。

ところで、筆と墨汁はいつ仕入れたのだろうか。・・・気になる。

そして、その仕入れ値も・・・気になる。

気づかれたのだろうか、レアンは二人の名前を見て、ふっと怪しい微笑みを浮かべた。

「ありがと。君たちは俺に今日の深夜までついてきてくれればいい。あ、まあ指示もするけどね。それだけで、儲かるんだから。よろしく。」とレアンはまた怪しく微笑んだ。

「聞きたいんだが、なぜあの店にいた？」とキバ

「ああ。フフ……それはねえ……。」「とレアン

「それは？」とキバとレイが声を合わせていった。

「金の亡者があつまるからさ。」

そしてレアンはニヤリと笑った。

「このミッションのこと誰にも言つなよ。言つたら、お前等、殺されるぞ。」

レアンは口に指をあてて、コソコソと喋った。空気に冷たい殺氣の
ようなものが横切った。

「！！」

「もしかしたら・・・コイツ、できる！！・・・だけど、警察だし、仲間になんてできない。」とレイは思った。

「魚太郎くん……これ、結構やばいかも。」とレイ。レイは魚太郎という名前を少々馬鹿にしつつ、言った。

「だ、だ、どう、だろう、おあが、な。」とキバ。キバは少しビビっているようだ。

（ほんとうにからかいがいのあるやつだ。だからレイの標的にされるのだ。）とミルトは心の中でつぶやいた。

「魚太郎くん、噛みすぎだよ。ビビッてる？まあ、私にとっては面白いけどさ！」とレイははしゃいだ。

「・・・ビ、ビビってなんか・・・ヴ・・・おうお、俺も、そう言いたい所だ。」とキバ

（なにか面白くて大変そうなことが起きる予感・・・フフ。）とミルトはつぶやいた。

龍のくせにのんきである。

六 楽しいカジノ

ミッションが始まる前に、やはり賭け事をして何か食べようとレイは企んだ。

「じゃあ、やってみますか！」

レイはスロットをすることにした。

このスロットはめずらしく、縦も斜めもなく、一列の横だけだ。

三つ同じ絵が出たら、コインが出てくる。

レイは椅子に座ると、コインをひとつ入れた。

キバはやり方を覚えようとして必死に見ている。

スロットがグルグルと回り始めた。

レイはレバーをガシャリと音を立てて、引いた。

一つ目の絵、さくらんぼ。

二つ目の絵、さくらんぼ。

三つ目の絵、さくらんぼ。

キバは「やったー」と叫んだ。

まわりの人に迷惑だ。

コイン取り出し口からチャリンと音を立てて、二枚のコインがでてきた。

キバはぴたりと叫ぶのを止めた。

「……………」

……果てしなく、しょぼい。

レイは無言でキバに一枚の（希望の）コインを渡した。

キバは無言でこっくりとうなずくと、隣のスロットへ座った。

キバはレバーを音も立てずに、ゆっくりと引いた。

一つ目の絵、みかん。

二つ目の絵、宝箱。

……この時点ですでに終わっている。

三つ目の絵、さくらんぼ。

キバは目を輝かせて言った。

「あ、おいしいっ！」

なにがおいしいのか、まったくわからない。

こうしてひとつの（希望の）コインは失われたのだ。

しかしまだ、レイのひとつのコインがある。

（レイ、私にまかせて。）とミルトが不意に話しかけてきた。

ふ……わかった。ㇿ

ミルトはバックの穴から前足を出し、勢いよくレバーを引いた。
そして最後に手から光をだした。

完全なる魔法である。しかも、龍だけの魔法。
イカサマ

一つ目の絵、最高得点の宝石の絵。

二つ目の絵、宝石の絵！

三つ目の絵、宝・石・の・絵！

今度はレイがうれしそうに小声で「やった。」と言った。
コイン取り出し口からジャラジャラと出てくるのかと思ったら、ド
サッと音を立てて、十枚のコインが出てきた。

「・・・・・・・・」

イカサマしたのに、イカサマで返されたような気分だ。
ミルトもさすがにご立腹のようだ。
グルルルと唸っている。

最高得点が十枚だけ。

何回かやって、五十枚に増やした。

ちりも積もれば、山となる。である。

レイはそれをお金にするとポケットいっぱいになった。
歩くたびに金がジャリジャリと音を立てた。

「まことに良き音なり。」とキバはつぶやいた。

外に出ると、まだ空は明るい青色だった。

まだ暖かい昼なのだ。

まだまだ時間はたっぷりある。

宿で待機していたティラと合流すると、レイたちは商店街へと足を
運んだ。

からっぽのお腹がやっと満たせるのだ。

これは、朝食なのだ。とレイは自分に言い聞かせた。

商店街はうるさいほど、にぎやかだった。
いろいろと物色して、結局お金は使い果たしてしまった。

キバが肉をおいしそうにほおばっている。

「もぐ……。だれだ！金を使い果たした奴！」

「いや！まぎれもなくお前のせいだよ！」
とティラとレイは同時に言った。

キバは肉をたくさん食べて最後の金を使い果たしてしまった。
レイとティラはクロワッサンとスコーンで我慢したのである。

キバは肉で膨れたおなかをでんつとたたくと、「食った。食った！」

「とつぶやいた。

非常に困る奴だ。

このままギャーピー騒いでいたら、もう、空はほんのりと赤く染まっていた。

七 楽しいミッション？

辺りは夕闇に包まれ、ミッションの時間が刻一刻と近づいてくる。
今、レイ達はティラと合流し、路地裏で作戦の話を聞いていた。

4人（正確にはもう一匹）がこう狭い路地裏でくっ付いていると窮屈である。

「場所は美術館だ。なぜかと言うと、怪盗カノン、〃が予告したからだ。深夜2時にあの有名な、微笑、〃という絵画を盗む！つてな。だ・か・ら！」レアンが気持ち悪いしゃべり方をしたら、不意に無表情でティラがレアンの頬を殴った。少しの間があいた。

レアンは少し驚いた様子だった。

そして二人と一匹も驚いた。・・・とっても。ティラらしくない行動である。

「兄さんから聞いていたけど、僕はこの人ダメです。ほんと。」とティラは手をはたいた。

「そ・う・だ・け・ど、話は聞かなくやダメだなあ。」とレアンはヒリヒリ痛む頬を撫でながらニツコリと言った。

ティラの目が、「コイツ、本当にむかつく！」と語っていた。

レアンはニツコリ笑うのをやめると真剣な目つきに変わった。

会ってからずっと笑った目だったので、目の色がわからなかったけど、今、血のような赤色だと気づいた。

「真剣な話に戻るぞ。お前らは入り口で2時になったら言え。『あつ！怪盗カノンだ！』と美術館の向かい側の空を指して言え。邪魔な、観客、〃がそっちに行くからな、俺達、〃にとって都合がいい。そうしたら美術館の裏にはしごを置いておくから、それの上って、屋上で待っている。」

一瞬、レイの真剣な目つきにレアンは戸惑ったように見えた。

「じゃあな。」とレアンはいつものものからかったような声で去って言った。

そしてレアンの姿は人ごみの中にスッと消えた。

深夜2時前・・・美術館は警察に囲まれ、とってもまぶしいスポット

トライトがぐるぐるとまわっている。

スポットライトが真つ白な美術館にあたると美術館がより、白くなるように見えた。

レイにはその光景が、まもなくショーが始まるような感じに見えた。ミルトはその光景をバツクの穴からのぞいていた。

とても楽しそうな表情を、レイはしていた。

（私も人間の姿に化けられればいいのに。・・・いや、いつか化けて楽しく一緒に旅をするぞ。）

レイたちは、路地裏から出ると一斉に叫んだ。

お腹の底から声をありつたけ、だした。

「怪盗力ノンだあああああ！」

三人とも指す場所は少々違ったが（少々どころかまったく）、この「ショーの観客」たちはここからきれいさっぱりと、いなくなつた。

そして警察の人たちも美術館からわらわらと出て行く。

レイはその光景を不思議そうに眺めた。

「これもレアンの作戦の内・・・？」

「まあいい。屋上に行こうではないか。」とキバが言い、誰もいなくなつた広場から美術館の裏に回つた。

角を曲がろうとしたとたんにレイの視界に黒い影が映つた。

「何!？」といったとたんに後ろを見ると、ティラとキバがあとかたも無く消えていた。

レイはフツとあやしい笑みをうかべて、背中から剣を抜いた。

「久しぶりだな・・・。この感じ。ちょっとうれしいかも。」とレイ。

（がんばれ。）とミルト。

もう深夜なのであたりは真つ暗である。

スポットライトが唯一の光だ。

目の前に黒い影が二つ落ちてきた。

「二人なのか。」

レイは正体不明の影に切りかかった！

そのひとつの影はさらに避けると「あら！あなたのお友達って結構おバカさんなのね。」と言った。

一人は女のようなのだ。

レイは挑発に乗ってしまい、もう一つの影に切りかかった。

その影は「ほらよつと。」といい軽々と避けてしまう。

もう一人は男のようなのだ。

へちつ。こいつら、速い。このときにキバとティラがいれば対抗できるのに……。」

レイは女の影の方に剣を突くそぶりを見せ、くると右回転をして二つの影に、みね打ちを食らわせた。

運よく二つの影は同時に仰向けになって倒れた。

レイはさらに二人につかみ掛かった。

「お前らは誰だ！」と、怖い風に一喝。

そのとき、スポットライトが二人に当たった。

「やあ。」と見知らぬ女が一言。こいつは怪盗カノンなのかな……？

「こ、こんにちは。ソウ・エマナくん。……あ。レイくん」と男。というより……

「ぎゃあ。レ、レアン！？何で！？」

二人とも怪盗らしい裏生地が真っ赤の黒マントを身にまとっている。そのとき不意に空から何かが降ってきた！

「んぎゃ〜」という叫び声をあげながら、猛烈ないきおいで落ちてくる！

レイは避けきれず、その下敷きになった。

「ぐあ！」

レイの上に乗ったものは、キバとティラであった。

二人とも目を回して無防備である。

レイは二人の下から這い出ると、キバの頭を無表情で殴った。

「ぐはっ！」

キバが顔を歪めて頭をさすった。

レイはレアンたちの方を振り返って満面の笑みを浮かべた。

「もうこの美術館には用はない……。早くしないと警察が戻ってくる。悪いが三人には少々寝てもらうぞ。」とレアンは声を低くして言った。

レイの顔が驚きに変わる前にレアンは瞬時に動いた。

「ごめんよ。三人とも。」レアンは三人の腹を殴った。レイの目の前に火花が散った。

三人ともぐはつと言い、前のめりに倒れた。

レアンはキバとレイを肩に抱えて、カノンはティラを持ち上げた。

「行くぞ。」

二人は影になり、ランプの暖か味のある光に燈された、建物や人々を股に、夜景を駆けた。

レイの鞆の穴からミルトは夜景を眺めた。

その景色はとても美しく、建物から漏れる光は星のようで、ミルトはそれを見ていて星空を走っているような感覚にとらわれた。

レイとキバ達も目をうつすらと開けて、ぼんやりとレアンの肩から眺めていた。

レイはカノンとレアンの足元を見てみた。

黒いブーツが艶やかに光る。地面に足はついていなく、足は空を切っている。

「空を飛んでいる……。！」

その景色の中、町を出て、草原に出た。夜風が髪をなびかせる。

空を見ると空いっぱい大きな白い月が顔を出していた。

草原はざわざわと音をたてて、まるでレイたちを歓迎しているようだ。

さらに草原をでて、山の一角についた。暖かい光が漏れる、木で造った山小屋が一つ、深い森の中にぽつんと建っている。

レアンとカノンは地に降り立つとレイたちをそつと地面に置いた。

「はあゝ重かったあゝ。」とカノンは伸びをして、山小屋に入って

いった。

扉からオレンジ色の暖かい光が漏れていた。

レイは立ち上がり、服に付いた土や埃をはらったあとキバとティラを無理やり立たせた。

レイは何も言わずに扉を乱暴にあけると言った。

「ミツシヨンのお金はいらない。だから、仲間にならないか？」

レアンは鼻で笑い、言った。

「警察なんだぜ？ 竜を持ち歩いているお前らなんか仲間にはなれないな。一応敵だからな。」ポケットの中に手を入れてお金をチャリチャリと言わせている。

「竜を持ち歩いていることが、ばれている！」

明るい所で二人の顔を見ると、まったく同じような顔をしていた。

二人とも金色に輝く金髪で目は血の色。双子なのだろうか。

その血の色の目を輝かせて、カノンは猛烈な勢いでレイの手を取った。カノンの手はなぜか汗でびっしょりとぬれていた。

「私が行く！ 前からやりたいことがあつて……。お宝とか……。お宝とか……。」

カノンはレアンの方を振り向いて「いいよね」と言いたげな顔をした。

しばしの沈黙が流れやがてその表情を見てレアンは笑った。

「……。だめだな。こいつらはそんなことを目的にして旅しているわけではないんだ。」とにやりと笑い、ポケットから銃を取り出して、「これで怪盗ごっこも終わりか。」と独り言をつぶやいた。カノンはとても残念そうな顔をして、ぶすつと頬を膨らませそっぽをむいてしまった。

「もう行こうよレイ。もうすぐ明日が来るよ。」とティラがレイの

青いターバンを引っ張った。

「天空城に送り出されるなんて、まっぴらごめんだね。」とキバが言い、外へ出て行った。

「そうだね。・・・あつ待つて。レアン。」

レイは言いレアンの顔の前に手を差し出した。

「なんだ？握手か？」とレアン

「ぜんぜん違う。」とレイは首を振った。

「ほら、ミッション分のお金。」とレイは手でお金の形をつくって、言った。

「現金な野郎だ。」とレアンは言い、さっきからポケットで転がしていたお金をレイの手に渡した。

レイは自分の手の中できらきらと輝く金貨を見て、うれしそうにんまりと笑った。

外に出るとあたりは霧に包まれようとしていた。

体に当たる霧はとても冷たく、風邪をひいてしまいそうだ。レイは結構前を歩いているキバとティラに小走りで追いついた。レイの横をミルトが霧を楽しみながらちよこちよこ歩いている。

レイは不意に後ろを振り向いてみた。

山小屋があるはずのところに山小屋はなかった。

霧に包まれて見えなくなってしまったのだろうか。

それとも、もともとないものだったのか。

レイは狐に化かされたかのように虚空を見つめていた。

二人には、また会いそうな気がする。

レイとミルトはそう思いました。

八 会談

レイ達は町にもどり、宿に泊まることになった。

玄関まで行くと、ライトニングがうれしそうに鳴いた。

宿の中は木の香りとポタージュスーの香りがいっしょになっていい香りだ。

「おなかすいたあ」とレイはいすに座った。

「そうですね。」とティラがうなずいた。

「で、俺らはどこを目的にしているんだ。天空城もどこにあるのかわからないのに。」とキバは唐突に言った。

「そうですね。」とティラ。

「うん。クリスタルタワーに行こうと思っている。」

「クリスタルタワーとは、平和を象徴して造られた建物である。その建物のすべてが水晶でつくられていて、水晶は雲を突き抜けている。美しい建物だが、裏には何かが隠されているという、うわさも流れる怪しい塔だ。クリスタルタワーの団体（宗教）を動かす人間は「姫」と呼ばれ、姿は見せるが、だれにも顔を見せないと云う。

しかし天空城の味方ではない……。ということは、いまからでも私たちが架空の宗教をつくって、味方にしちゃえば遅くないってこと。味方にできなくても、天空城の場所は知っているはず、人質にして無理やり聞き出すっていうのもありだし……。さあ、どっちが楽かな……。私たちにとつて。」

レイの説明中に二人は運ばれたスーブをぺろりとたいらげていた。「うーん、僕、暴力的なのはきらいだけど、架空の宗教をつくるのは難しいかな……。そんなに僕たち頭よくないし……。」とテイラ。

実際に頭が良い順だと、龍神、ミルト、大賢者、賢者、レイとティラ、ライトニング、大魔物、その他魑魅魍魎、……。キバ。という感じである。ミルトは最強に頭がいいのだ。「俺は頭がいいから、どっちでもよいぞ。」とキバ

しばしの間があいた。

レイとティラはキバをにらみつけた。キバは石化したくらいにかたまった。

（フン、おもしろい状況ではないか。）とミルトは鼻で笑った。ミルトはこの状況を（蛇ににらまれた蛙）に似せて、（レイににらまれたキバ）と呼ぶことにした。

「じゃあ暴力的に行こう。」とレイはうれしそうに言った。

（楽しくなりそうだ。）とミルト。

ミルトもやっ和大暴れできる日がくるのだ。

うれしくないはずがない。

2章 蠢く者

Part 1

二章 蠢く者

一 天空の表に立つ者

「うん。」

昼まで寝ていたようだ。

体が重くて、だるい。

わたしはベッドにもぐりこんで二度寝を試みた。

やはり、だるくて眠れない。

「しょうがない、おきてみるか。」

わたしの大きな部屋にさびしく独り言が響いた。

わたしはベッドから静かに降りるとミシミシと不快な音が聞こえた。

歩くと頭がガンガンと痛い。

カーテンを開けると昼の日差しが差し込んできた。

わたしはまぶしくて、目を細めた。

天気は今日も快晴、いい天気だ。

不意に扉の外から声が聞こえた。

私はすばやくベッドにもぐると、耳を澄ました。

「十歳の少女にはボスはまだ勤まらないのでは。」

男の声だ。

少女とは失礼な。

あの方でしょ、あの方！

と心の中で独り言を言った。

「いえ、あの方なら勤まります。絶対に。私は長年あの方について、一番あの方を知っているのです。長年といっても十年ですが。あと、お言葉にお気をつけて。失言は命取りになりますよ。」

わたしの親友、女秘書とも言える、リムである。
リムは十七歳である。

リムは私が生まれた頃から一緒だった人間だ。

剣術から魔法、勉強、すべて二人でならい、ここまで来た。

だからなにもかも私と同レベル・・・と、言いたいところだが、精神年齢だけは私が劣っているのだ。

・・・あたりまえか。

リムをいいなっと思っ事は多々ある。

目の色と髪の毛はきれいな真紅・・・。

わたしはそんなきれいな色じゃなくて、焦げ茶である。

だが、目は自慢できる金色なのだ。

この金色の目は風華一族で代々受け継がれてきたものだ。

「フツ・・・おまえはまだ知らないのか。マナはただの操り人形にすぎない。本当に天空に立つものはあの方なのだ。天空城の表に立つ者がマナなのであれば、裏に立つ者はあの方だ。」

最後には男は狂い笑いを始めた。

わたしは必死で耳をふさいだ。

「やめて!!」

必死に耳を塞いで叫んでもいつこうに笑いは治まらない。

耳に水が流れるように男の笑いがはいつてくる。

耳が痛い。

「フ・・・。失言・・・ですね。死んで自分が馬鹿だったと反省しなさい。」

カチャ。

リムの剣を鞘から出す音が聞こえた。

「知らない・・・。」と何回も繰り返しつぶやいた。

無音になった。切る音は聞こえなかった。
扉のしたから真っ赤なものが流れてきた。
それは白い床を鮮やかに赤く染めた。

みるみる赤く染まっていく。

きつと、この赤い液体は獣になるとわたしは思った。
そしてそのままわたしに噛み付いてくるんだ。

わたしは目を逸らした。

これまで戦闘訓練であれをいやというほど見た。
しかしリムが訓練以外で、斬るところを私ははじめて見てしまった。

「はっ！・・・夢か。」

マナは真っ白の大きなベッドから飛び起きた。

手には汗でぬれていてべとべととしている。

きている服がピタピタと張り付いて気持ち悪い。

（夢でよかった。）

でも心底実際にあったことだと思った。

カーテンを開いて外を見ると、まだ日は出ていなかった。

星がでているが、真っ暗である。

紅い月がきらりと光った。

暗い空の中、紅い月がわたしの目がおかしいのか、月に弧を描くように裂け目が出来てわたしを「ふふふ。愚かな人間だ。」と笑った

ように見えた。

（紅い月・・・やだな。不吉だもん。）

マナは壁にかかっている時計を見た。

短い針はちょうど3を指している。

「まだ深夜の3時だ・・・。リム・・・今、仕事中かな。」

マナはよく深夜におきてしまうと、リムのところへ遊びに行くのだった。

リムが鉛筆で書類になにやらを書いている音が心地よく、いつの間にか寝てしまう。

だがあの夢を見てから、この部屋からあまり出て行きたくなくなった。

この部屋をでていったらあの男に会ってしまうような気がして。

このドアを開けば、男が待っている・・・。

マナは頭を振ってその考えを振り払った。

いたとしても、斬るだけだ。

（今夜は紅い月・・・。リムを探さないと何か起こるかもしれない。）

マナは扉を少し開けて外を見回した。

外は少し肌寒くて、マナは部屋に戻った。

寝る前に脱いだ白いジャケットを腕を通さずにはおった。

この白いジャケットはボスの証。

羽毛でできていて、とても暖かい。

そしてまた外に出た。

うん、大丈夫。

寒くない。

外を見ると、兵士が3人ほど廊下を回っているところだった。

理由もなく部屋から出ると兵士にとっつかまって終わりだが、マナはごまかすのが得意だった。

マナは小走りで兵士に近寄った。

鎧は月の光でてらてらと光って、いかにも高級そうな龍騎士の鎧だった。

背中には三叉の槍を背負っている。

今日の兵士は若い新米で影が薄い。

まあ私にとっては印象深いのだが。

「ヴァッシュ」という名の男だ。

最近、リムに叱られたらしいが……。 (リム、怖いだろうね。)

近づくとも新米くんはかなり驚いた。目をしかと開いている。

兵士が「なぜこんなところにいるのですか？」と聞く前にマナはいわけを言った。

「今日、私は正夢をみた。・・・たぶん。今宵は紅月だ。不吉な予感がするのだ。これは本当。警護を厳重にシラミつぶしに回るのがわかったな。」

「あつ、はっ、はいいい！」

兵士と新米くんは焦ってビシッと敬礼すると、クルリと方向転換した。

(よし、私の行く方向と正反対だ！)

そしてマナはリムの部屋へと走り始めた。

マナは後ろを見ながら走っているとドンツと硬い何かにぶつかった。

「イタッ！」

マナはしりもちをついて、顔をゆがめてお尻をさすった。

前を見ると死神のような衣装を着た人が立っていた。

ギームという名の男だ。

年齢は十七くらいだろうか。

全身黒くてフードは目の下まで隠れている。

なんか気に入らない、表情のわからない男だった。

「すみません。マナ様。大丈夫ですか？」

かける言葉はやさしいが、声は冷たくまったく、感情はこもっていない。

男が手を差し出してきた。

「大丈夫。ありがとう。」

の言葉とは正反対に私は差し出された手を振り払った。

さっきの夢をおもいだしてしまい、少し声が震えた。

マナは、昔からコイツが怪しいと思っていた。

いわゆる夢のへ 天空の裏に立つ者 くだと思う。

だからリムに行動をすべて記録してもらった。

そうしないと私だけが知っているの完璧なへ 計画 々がバラバラになりそうな気がして。

マナは急いで立ち、ゆっくりとした足取りで男の横を過ぎた。

男はマナの方へ振り向かず冷たい声を放った。

「マナ様、どこへ行かれるのです？」

その声はさっきの声より冷たいものだった。

その冷たい声はマナをつらぬいた。

「ちょっとトイレに行こうと思って。」

「・・・あなたにしてはくだらない嘘ですね。・・・今日は出歩かないほうがいいと思いますよ。今夜は紅月ですから。・・・では。」と男は歩き出した。

すこしの間、私は動けなかった。

あの男に私の計画がばれているように思えた。

心を見透かされているように思えた。

マナはリムのことを思い出して、はっとした。

（リム、大丈夫かな。）

マナはリムの部屋へと一直線に走った。

心の中で「大丈夫かな。」とリムのことを心配しているが、心底、自分の不安を消すためなのだった。

リムは絶対に大丈夫だ。

でもマナの不安はどんどん広がるのだった。

あの夢の中の 血のように。

廊下にはマナの小さな足音だけが響いていた。
細い廊下はその音をよく響かせた。

ここを兵士に見つかつたら部屋に引き戻されること間違いなしだ。
マナは少し冷静になつていきなり走るのを止めた。

走りすぎて息がみだれ、ハアハア言い始めた。
それをぐつと我慢すると、廊下は無音になった。

マナは冷静に歩き始めたが、不安はどんどん広がつていった。
不安がピークに達したとき、マナはリムの部屋の前に来た。

この迷宮のような城の中から一つの部屋を探したのだ。
マナがドアを開けると暖かい空気が漏れてきた。

その暖かい空気はマナを包み込んだ。
不安がじわじわと消えていくのがわかつた。

「あつ、マナ？」というリムの声が聞こえた。

リムの声が聞こえると心の中の紅い不安がすっかりと無くなつた。
リムは人がいないと私を呼び捨てにした。

少しリムの声を聞いてうれしくなつた。

リムは私の顔を見ると、少し驚いた顔をして、ほほえんだ。

「今日も来ちゃつた。」

とマナは恥ずかしそうにほほえんだ。

リムは眼鏡をクイツと上げると仕事に戻つた。

リムの部屋は私の部屋と構造は同じだが、すこし小さめにできていた。

しかも、リムの部屋は私物が置いてなく、殺風景だ。

床には私用の毛布と敷布団が敷いてある。

そのとなりには白いリムのベッドが置いてあつた。

私はそのままリムの暖かい部屋の中で鉛筆の音を聞きながら、毛布の中にもぐりこみ、眠ってしまった。

（明日は会議のあとにゲームをつけてみよう。）

二 もうひとつの組織

マナは会議に出ていた。

白く、長いテーブルにたくさんの人が並んで座っている。

一人ずつ、前には紅茶が置いてあり、会議室は甘くていい香りに包まれていた。

マナはもちろんお誕生日席に座り、足を組んでいる。

その左側には秘書のリム、右側にはゲームが姿勢正しく座っている。マナは口を開いた。

「私には計画がある。諸君にはまだ話せない、失敗する確率が多いからな。まあ実際には永遠に話すつもりはないが……。残念ながら、諸君には何を言われても変更する気はない。」

「マナさま！マナさまの身近な人には教えるのですか！」と一人の兵士が席をたった。

新米くんだ。

勢いつけてたつたので、カップから紅茶が少々こぼれてしまった。

マナは微笑みを浮かべた。

まったく気の抜ける質問だ。

私が嘘をついているとも思っているのだろうか。

それとも会議の空気にかんばって入れてもらおうとしているのか。

「大丈夫だ。安心しろ。秘書にも話しておらん。話そうとも思ったがやめた。」

質問に答えるとき、新米くんは自分でこぼした紅茶を一生懸命に自分の袖で拭いていた。答えは彼の耳には入らなかっただろう。なぜなら、リムがとっても冷たい目で新米くんを見ているのだから。

「マナ様はその計画をお一人で実行するのですか？」ともう一人の中年兵士が言った。

するどいな。

「当たり前です。わたしはこの計画を実行したばかりなので。あとみんなにばれたら、反対されること間違いなしだから。ブーブー言われるのはもう、いやなんだ。私はボスなんだから、ボスらしく行動する権利がある！……もう質問コーナーは終わりでもいいかなじゃあ、君たちの今後の仕事を今から相談しようか。」

マナはそういうとおいしそうにズズと音をたてて、紅茶を啜った。紅茶の甘い香りが口の中にふわふわと広がった。

会議が終わると会議室から兵士たちがぞろぞろと出てきた。

そのまま机の影に隠れていると、ギームが会議室から出てきた。

ギームの影のようにマナは歩いた。

リムのくれた銀色月長石を持っていると、人間の視界に入らないらしい。

この石は月族だけに本領発揮するそうさ。まだまだ未知なる能力が眠っているということだ。

ということは、人間からみれば、マナは透明人間だ。だが、動物や魔物には気づかれる。そしてしゃべったりするとすぐに気づかれる。

ようするに息を殺して行動しなければならないのだ。

ギームは迷宮のような廊下を迷わず歩いた。

まるで目的地に吸い付けられるように。

歩くのが速くて見失いそうだったが、マナは足を速めて歩いた。

（速いな・・・どこに行くんだろ。何も無いといいけど。）

ギームは角を曲がった。

マナも急いで曲がる。

ギームは立ち止まり、誰かと話していた。

マナはとつさに耳を澄ました。

「あっちの組織はどう動いている？」とギーム。

「あらら、ギームくんつけられてるみたいだね。」

もう一人の男はギームを呼び捨てにするほど、権力があるのだろうか。

ばれている。やばい。でも最後まで聞かなきゃ。

「・・・いい。聞かせろ。」

「わかったよ。」と男はあきれたような声をだした。

「」

男はギームの耳元でなにかをささやいた。

「・・・そうか。」

・・・聞こえない。聞こえないよ。

「　　天空城　　、　　クリスタルタワー　　、　　闇の扉　　、

　　達　　がいつかぶつかることはよく覚えていたほ

うがいいよ。僕は世界的大戦になると思うよ。じゃ。」

男は一瞬にしてブウンという機械音のような音と共に消えた……。

一部聞こえなかったけど……。人かな。

それにしても、闇の扉とはなんの組織なのだろう？

とにかく、私の計画で大戦を阻止しなければ。

そんなことを考えていると、ギームの事を思い出した。

ギームは冷静な目でこちらを見ている。

しかし私を直視していない。

「…………誰だ。」

「……………」

マナは足音をたてずに、ゆっくりと歩き始めた。

するとギームは指をマナに向けた。

「…………fire storm」

指先から火の玉が次々とマナに向かってくる！

「……………」

マナはひよいひよいと避けたが、最後の一つに頬があたってしまった。

熱い！という悲鳴を飲み込んで、足音も気にせず、マナは駆けた。

人ごみに隠れれば平気なはず。

ギームは追いかけてきたが、それほど速くはなかった。

どんどん遠ざかった。

ギームは追いかけるのをあきらめたようだ。

マナはひとごみの真ん中に来ると、銀色月長石を左ポケットから取り出した。

月長石は銀色にきらきらと輝いている。

マナは月長石のひんやりとした表面を撫でた。

これで私は見えるようになるはず。

いきなりマナが現れたので、周りの人が少々驚いていたが、マナが口^{くち}に指をあてて「しいい」と言うと黙^{もく}り込んでくれた。

そしてマナはひとりきりになると、廊下^{ろうか}をのんびりと歩き始めた。

（リムにも報告^{ほうこく}しなくちゃ・・・。）

と思いつつ、窓の外を見た。

灰色の厚い雲が空を覆っている。

歩きながら外の景色を見ていると、水滴^{すいせき}がぼつぼつと窓に当たり、かわいい音をだした。

そのうちその音はどんどん激しさを増して、ザーザーと降り始めた。暗くなつて窓にはマナの顔が映った。

窓の中の、マナの目から水滴が流れ落ちた。

自分が泣いているように見えた。

リムに会つと、マナは人が居ない部屋に入り、さっきの話^{はなし}を始めた。

リムが話しを聞き終わると「そうか。」と一言で終わった。

リムは少し間をあけると口を開いた。

「マナは本当に私に話さなくて平気なの？」

重そうな口調だった。

「なんのこと？」としらばくれても無駄だった。

「・・・平気。この計画を君に話したら、反対するだろうし、妨害もしてくるだろう。」

これでリムは黙^{もく}り込んで、話が終わった。

（闇の扉について、少々探らなければならぬようだな。）

マナはニヤリと笑った。

（私には策がある。金で動いてくれる、とっておきの情報通がいる。

けっこう手強い奴が・・・。）

その人はいろいろな組織に平等に接していて、全部の情報を持っている、せこい人である。そしてつかみどころがない。今後の力ギとなるであろう男だ。

マナは自分の部屋に戻ると、通信機を手にとった。

これだけが連絡を取れる。その人にもらったものである。

「もしもし？」

少しの間が空いてから返事が聞こえた。

「あつ。はいはい。マナお嬢さんですね。今、レイさん達と絵を盗もうとしてるんですけど・・・。まあいいや。はい、なんでしょうか。」

機械音に乗って、気が抜けるような声が聞こえた。

この男の名前をレアンという。

いろいろなことに手をつけている奴だ。

たとえば警察、怪盗、天空城の兵士などなど。まだ、たくさんある。レアンにはけっこう前から世話になっている。

「闇の扉・・・という組織を知っているか。」

少しの間があいてから返事が来た。

「ええ。もちろん知っていますよ。」

知りたい。

「話してくれないか。」

「それは、ちょっと。こんなところで話したら・・・。僕の仕事、成り立ちませんし・・・。」

「じゃあ、私がそちらへ移動するぞ。」

リムにこの事を伝えればなんとか、まいてくれるはずだ。私が重い病気にかかったことにすればよいのだ。

そして臨時ボスは・・・リムとしよう。

リムなら了解してくれるはずだ。

・・・後に考えよう。

「あつ、そうしましょう。では、ここ大陸ではない方がいいですね・・・どうします？マナさん。」

「風華大陸でよからう。」

マナはちよつとウキウキしたようすで言った。

「マナさんが行きたいだけ、なんじゃないですか。でも、よろしいですよ。華ノ国で会いましょう。三日後ということでもいいですよ。」

「ああ。じゃあな。」

マナは通信機をズボンのポケットに入れた。

よし、あとはリムにお願いするだけだ。

リムに話すと、反抗された。

「はい！？私はまく事ができる自信があるけど、いくらなんでも、危険よ！」

リムは私の中の、反抗期のような。

「お願い。」

とリムをただ見つめる。

「私が行きます。」とリム

「いや、そんなことしたら怪しまれるであらう。」

「マナが行っても同じよ！」

「いや、リムは私と違う事をやらしかねない。たとえば、計画の内容を聞くとか。」

「・・・・・・・・」

リムは黙り込んだ。

「凶星だろう・・・・。」

「っもう！」

とリムはこぶしを壁にたたきつけた。

この部屋にぽっかりと穴が開いた。

すごい馬鹿力だ。

外で歩いている奴は数人ビビっている。

人間は本当の事を言われると、怒るのである。

「・・・・・・・・わかりました。なんとかします。」

とリムは冷静さを取り戻した。

「月族の人間と同じ方向を歩くことになるけど・・・・それでもいい？」とリム

マナは少し驚くと、謎のほほえみを浮かべた。

「大丈夫。彼女は私の姿なんて見た事ないんだから。」

とちよつとウキウキしているようだった。

「天空城をよろしく。」

「わかっていきますとも。」とリムは力強くうなずいた。

2章 蠢く者

Part 1（後書き）

前回のことなんですが・・・、魚太郎の読み方はうおたろうでもぎよたろうでも、自分の好きなような呼び方で読んでください

2章 蠢く者 Part 2

三 水の神殿

二つの大船が海にプカプカと浮いていた。

一つは知らない人のもので、

もうひとつは・・・

「海を渡るなんて、聞いてないぞー!!!」

キバは広大な海の中で叫んだ。

広大な心を持った、海は叫びを受け止めてくれた。

もう二日も船の上で生活している。

船は港町で盗んできた物だ。

いかだでもなく、ヨットでもない、最大規模の大船である。

誰もいない大船に乗り込んで、勝手に出航させたのはまぎれもなく、レイであった。

これでもう、悪名高い三人組（ミルト以外）はあっという間に賞金首として広まった。

ライトニング（あくまでも馬）はどう船に乗らせようとしても、反抗してきたので宿に置かせてもらうことにした。迷惑だが仕方ない。「三日もかかるなんて、最初は驚いたけど、向こう側の大陸に行くには当たり前なの所要時間かな。」とティラ

ティラはゴーグルを白い布切れでクイクイいわせながら、磨いていた。

キバはすっきりとするのか、さつきからずっと、叫んでいる。

ミルトは叫び声を気にせず、潮風に吹かれて人間に化ける修行をしている。

実は、ミルトはレイのバックに入りきらないほど、二日間で急成長した。

こんなにも早く育つとは、何かが近づいていく証拠だ。

ミルトは二足で立つと、もうティラの背を追いつくのである。

だから人間になって町を歩こうというのだ。

さつきから人間になっている……なれているが、尻尾が出た人間や、体全体白い毛に覆われている人間など。人間の年齢はさまざまで少女、中年の女、おばあさんなど、今は女が気に入っている様子だ。

おもしろおかしい物体と化しているので、この場合キメラと呼んだ方が正しいだろう。

その反面、レイはいらいらしていた。

目の前に風華大陸が見えるというのに、風向きが変わってしまったために、一向に近づかない。

この船の船長が座っていたと思われる、木製の大きな椅子に、足を組んで座っている。しかもその足は貧乏揺すりで落ち着きがない。

「キバ、もうすぐ着くと思うから静かにしてくれる？」

とレイが冷たい声で言う、キバはやつと黙り込んだ。

「兄さん。作戦成功するといいですね。」

「うむ。俺は必ず、成功すると思っっているぞ。」

「キバ！船の運転変わってよ。」とレイ

レイはもう二日間ずっと運転している。

まあ、休憩するときは変わってもらったが。

「わかった。」

とキバは言う、と運転席についた。

レイは明るく「やったあ」と言う、とミルトの方へ近づき、修行を手伝い始めた。

ごきげんなめがが一転したようだ。

「意識するでは、ない。感じるのじゃ。」と適当な事をミルトに言った。

「集中して、感じればいいのね……。わかった。」とキメラ（実際はミルト）が答えた。ティラは「そんな、適当な……。」「と思っっていたりしていたのだが……。」

「そうじゃ。そうじゃ。」とレイが言った。

するとキメラ（実際はミルト）がレイをにらみつけた。

「師匠、静かにしてもらえないでしょうか。集中したいのです。」
「うむ。」

ミルトは床に円を三重に描くと、ぼそつと何かをつぶやいた。
爆発音と同時にあたりに煙が広がった。

煙がだんだん薄れていくと、人影が見えた。

ミルトは完璧な人間と化したのだ！

しっぽも出ていないし、鱗もついていない。

しかも、レイの背の高さ、肌は白く・・・すらつとしていて・・・
白いワンピースを着ている・・・髪の毛も長く、白っぽい金髪で・・・

簡単に言くと、美女だ。

「これがミルトの趣味なのか・・・」

とティラは聞こえないように、つぶやいた。

「よくやった、ミルトよ！」

レイはミルトを見上げて、うれしそうに言った。

「ありがとうございます！師匠！」

ティラは見ていて思った。

「なんか二人の世界観が変わったような気がするけど・・・。気のせいかな。」

するとレイがいきなりティラの前に来て、静かに言った。

「気のせいではありませんね！」と。

「あれ・・・？レイさんって、龍の心しかわからないんじゃないんですか？」

「集中すれば、何でもできちゃうの。」

「いつものレイさんに戻ったが、ティラはレイさんのことが少々怖くなった。」

「いや・・・ないだろ・・・。う、うん。ないってことで。」

「今も考えたでしょ。」とレイ

「あの、本当に聞こえるのですか？」とティラ。

「うっん、聞こえない。」

あっさりした答えを聞いて、ティラはぽかんと口をあけた。

レイはその顔を見て、ミルトと一緒に「がっはっは」と豪快に笑った。

そんな面白いことが続いた中、人間の匂いをかぎつけたのか、魔物が静かにこちらへと近づいていた。

魔物は海からレイたちに襲い掛かるつもりだ。

大きな影が船の下を横切る

その気配を感じたのか、ミルトは一瞬で煙をもうもうと上げて、龍に戻り、耳をぴくぴくとさせた。

（レイ、なんか来た。）とミルト

へそつみたいだね。」とレイ

そしてキバとティラも、二人の空気を感じたのか、戦闘態勢にはいった。

これだと、隣の船も巻き込んでしまうだろう。

隣の船も気づいたのだろう、船の動きが止まった。

巻き込まれることを承知しているようだ。

へ・・・ということは、隣の船は大物であろう・・・。」とレイ

（レイ！そんなこと、今かんがえないで、ちゃんと集中して！そんなこと、後で聞けばいいでしょ！）とレイをミルトが叱る。

ザッパーン！

と、音がして、魔物だ！とレイは思ったが、違った。

二つの船はぐるぐると回転している。

渦潮に巻き込まれたのだ。

二つの船は海に沈んだ。

そのまま、ゆっくりと落ちていく。

レイもそのまま深い青にゆっくりと沈んでいく。

このようなときに限って、体は鉛のように重く、動かなかった。レイの意識はもうなくなりそうだった。

空気の変わりに、水が入り込んでくる。

しかし、咳き込んだら終わりだ。

・・・息が詰まる。

まわりを見ても、人は見当たらなかった。

「苦しい・・・。死ぬ・・・。」

目の前がぼんやりとしてきた。

「まだ、だめなのに・・・。」

視界の端に小さな人影が見えた。

こちらにどんどん近づいてくる。

体がふつと軽くなるのを感じると、安心してしまい、レイは気を失った。

「おい。レイくん？だめだ。気を完全に失っている。」

気の抜けた、聞き覚えのある声が響いた。

目を開けようとしたが、まぶたが重くてあけられない。

「大丈夫か？ 君、溺れていたぞ。」

こちらは聞き覚えのない女の子の声だ。

「レイ！レイ！」

この女の声もどこかで聞いたような声だ。

「くう、意識が遠のいていく・・・。」

目が覚めた。

レイは寝転んだまま、あたりを見渡してみた。

何か、遺跡の中のような。

遺跡の柱は海のような深い青色をしていて、壁全体が柱に埋め尽くされている。

どこことなく、この神聖な感じは、見た目もそうだが、光の神殿に似ている。

水の音がチャプチャプと聞こえる・・・

水の音はレイの恐怖をそそった。

「あつ。おきたみたいだな。おーいレアン君。」

と、女の子が私の顔をのぞいた。

目が合うと金色の目を輝かせて、女の子はほほえんだ。

レイはほほえみかえして、立ち上がった。

「服が早くも乾ききっている。それとも、長いこと気を失っていたのかな・・・。」

「こ・ん・に・ち・は。また会ってしまったね。レイくん。」と男

「お久しぶりです！」と女は手をあげて、指をひらひらとさせた。

「あ　　レアン！カノン！　なんで!？」

前もこのような感じだったような気がする。

これがデジャヴというものか。

ふむ、覚えておこう。

不意に、女の子が前に進み出て言った。

「申し遅れました、私は　マナ　と、いう者です。君とは同じ年だから、仲良くしてね。」

反応に困ったが、とりあえず自己紹介をして、「よろしく」と言っておいた。

しかし、なぜ私の年齢がわかるのだろうか。不思議だ・・・。

「で、キバとティラとミルトは一緒なのね？」とレイ。

「うん、忍者の人と、ひらひらの人と、龍は一緒にこの遺跡に入っていたよ。」と、マナ

「大丈夫、テイラくんたちなら、元気いっぱいに探索していると思うのよ。」とカノン

「てか、さっきから魔物の叫び声聞こえない？ 水龍のおたけびみたいな。」

カノンがはずむように言った。

「うん、聞こえるね。」とレイは平然と言った。

「これは、水龍が威嚇している声だよ。けっこう近くにいるみたい。」とマナは平然と言った。

グオオオアア！！

いいタイミングで水龍の叫びが聞こえた。

こちらの人たちなら、殺気がありあまるほどあるので大丈夫だが、このときキバとテイラなら震え上がっていただろう。

逃げ回る二人を抑える役は、ミルトにまわるだろう。

ミルトの苦痛にしかないはずだ。

あの二人を抑えるのは 実に大変である。

いつもはレイがやっているのだが。

さあ、二人と一匹（特に一匹）は大丈夫であろうか。

そして・・・我ながら二人を抑えるリーダーシップはすごいと思う。

・・・自画自賛だ。

「じゃあ、僕達も行きましょうか。」とレアンが言った。

「そうしましょう。」とマナはレイにほほえみかけた。

その頃、キバたちは・・・？

グオオオアア！！

「うひゃあ。い、今、叫び声聞こえなかった？」とティラはとびあがった。

「うむ……。あれはたぶん、名も無き水龍だな。召喚されたものみたいだ。」

とミルト。

今は男の気分なのだろうか、ミルトは美青年になっていた。

やはり服は白一色である。咳払いをコホンとすると、「やはり、コミュニケーションはいいな。」とつぶやいた。

ミルトの咳払いの理由は、ティラとミルトのまわりを　きゃあきゃあ　いいながら、キバが走っているからだ。

ただの能無し。

それがキバのとっても、とーっても大きな欠点である。

「床が水浸しだね……。と、いうことは水龍がとっても近くにいらつてことかな……。」

しばらく歩くと、風が吹きつけてくる通路を見つけた。

キバは走り回るのを止めて、ぴたっと立ち止まった。

「……声が聞こえる。」

前をよく見ると、扉が三つも並んでいた。

左側は真紅の色、真ん中は真っ白、右側は深緑だ。

キバは真ん中の扉のドアノブを手に取りうつとした。

「……やめろ。」

ミルトはすばやくキバの手首を握った。

「なぜだ！」

「なんで?!」

とキバとティラが同時に言った。

^{トラップ}
「罠だ。」

真紅の扉のほうからゴチャゴチャとした雑音が聞こえた。

ミルトはゆっくりと真紅の扉に近づいた。

ミルトは真紅の扉の前に立ち、ドアノブに手をつけた。

ギ、ギギギ・・・ガッシャン

向こうの扉から鉄やりが天井から落ちるような音と悲鳴が聞こえた。

しばらく緊迫した状態が続いた。

しばらく時間が経つとミルトは口をあけた。

「開けてみるよ。」

キバとティラは、遠いところからうなずいた。

信用してないようだ。

まあ、いい。

ミルトは フウ と息を吐くとドアノブをねじり、扉を開けた。

ミルトの勝ち誇ったような顔が見えるとともに、何かがいろいろと落ちてきた。

ミルトの顔は瞬時に驚きに変わった。

ミルトの上にいるいろと降り積もった。

その景色は実に面白い。

俺はププッと吹いた。

けっこう前にもあったあれだ。

あれは俺が下敷きになったが、今度はミルトの番のようだ。

ミルトは煙を上げて、龍の姿に戻った。

いかにも悔しそうな顔をしている。

上に積もったいろいろなものとは、

えーっと、上に乗っているのが

レアン、レイ、カノン・・・誰だろ？

見覚えのない女の子がクスクスと、笑っている。

レアンとカノンが俺とティラに気づくと、「やあ」と手を上げた。

レイもうれしそうに笑っている。

みんな無事でなによりだ。

しかし、なぜレアンとカノンがここに居るのか。
あの女の子は誰なのか、キバは強がって聞きださなかった。

バカだな。聞き出せばいいのに。

一件落着、ということにして少し休憩することになった。

ついでに、扉のどちらに入るかも決めることになった。

真紅の扉はレイたちが出てきたので、もといた所に戻ってしまう。
問題は真っ白な扉と深緑の扉だ。

と、マナは考える。

だが、それ以上の問題は光の龍、ミルトだ。

ここでつかまえれば、月族のレイは用なしなのだ。

レアンはマナが鋭い目つきで何かを考えている様子を楽しげに見守った。

やはり龍のことを考えている……。

ここでつかまえれば、俺との相談も意味がなくなる……かもな。

マナはレイに近づいた。

「ねえ、レイ。」

「なあに？」

「君は何を目的に旅をしているの？」

レイは悲しそうに、ふっと笑った。

「天空城だよ。」

「そうか……。うん、それだけ。ごめんね、辛いこと聞いちゃって。」

レイは無理に笑顔を作ると、首を横にふった。

マナはレイに背中を向けて、考えた。

いまにも笑いがこみあげてきそうだったが、それを押し殺した。

自分から出迎えに来てくれるそうだと。

それはいい。

もっと、利用してやるには……。

龍に手をつけるのは、もっと後のことになりそうだと。

「あつ、そうだと。わたし、盗賊やっていたから、ドアの罠、得意だよ！」とカノンがいきなり立ち上がった。

「そう！じゃあ、お手並み拝見。」とレイ。

カノンはまず、深緑の扉のドアノブをじっくりと眺めた。曲線の部分をゆっくりと撫でる。

手をあごにあてて、考えている様子だと。

そして今度は、扉を撫でた。

ざらざらとした、石の手触りだと。

今度はコンコンと、扉をたたき始めた。

曇った音が多い。中に何かがあるようだ。

カノンは扉に口をあてて、「わあー！」といきなり叫んだ。

耳を当てると、カノンの声が部屋の中で、響いているのがわかった。

「ふーん。」

今度は真紅の扉に手をつけた。

「そこは僕たちが出てきた所だけど……。」とティラ。

「真紅の扉は罠あり、だけど、そこまで危険じゃなかったわね。私達の地面がなくなつて、私達は落ちてきた……。ただ、それだけだった。」

カノンはティラの質問に答えなかった。

なにやら独り言で物事を整理しているようだ。

真紅の扉を撫でた。

ざらざらした触り心地がある。

今度は真つ白な扉を撫でた。

艶々している……。

綺麗に磨かれた、石のようだ。

扉をたたくと、コンコン、といい音が部屋に響いた。

「これ、素人でもわかるわ。真紅の扉と深緑の扉は人工的に、新しく造られたものね。白い扉が本物よ！」

カノンは「まったく、てきとーね。」と、得意げのようだ。

レイたちは白い扉を開けると、先へ進んだ……。

四 水の妖精 ウォーターフェアリー

部屋はドーム型になっていて、声がやけに響いた。とても、じめじめしている。

壁や地面には水のような、水じゃないような、液体が張り付いていた。

みずあめのような、どろどろとした感触だ。触ると少しヒリヒリした感触が残った。

ドームの真ん中には透明の丸い、お皿がひとつ置いてあった。

お皿の中にも水あめのような物体がぬらぬらとうごめいていた。

お皿はあやしく艶々と光っている。

お皿の上には、光の神殿にもあったような、鍵がぽつんと立っ

た。

ミルトは体が衝動的に動いていた。
鍵がミルトを呼び寄せるのだ。

みんなはその様子を見守っていた。

魔物やら、なんやら出てくるのは承知しているのである。

ミルトの指（前足）が、鍵に触れた。

お皿に入っていた、水あめのような液体がミルトの前足にまきついた。

「ギャウ！」

ミルトはあまりの痛さに吠えた。

レイがミルトのしっぽを持ち、引っ張った。

すぽんと高い音を上げて、ミルトは水あめから抜け出した。

レイは勢いあまり、しりもちをついた。

ミルトは前足を見た。

ミルトの手（前足）の中に鍵はなかった。

鍵は水あめのような液体の中に残ってしまったのだ。

お皿の液体が人間のような形をつくっていく……。

やがて液体は少女の形をつくった。

鍵は少女の心臓のように、バクバクと鼓動を刻んでいる。

「小さき光の龍よ、我の源を絶つてみせよ」

少女は地面に手を押し付けた。

押し付けた手の所から魔法陣がみえると部屋を包み込んでいく。

魔法陣が天井まで達すると、魔法陣の線は青白く光った。

青白く光ったと思うとその線から水が湧き出てきた。

水はどんどん増え、レイはひざまで水に浸かった。

その水は真ん中にみるみると集まり、水龍を形作った。

水龍は一声吠えた。

グオオオアア！

「ワオ。これがあの叫びの正体よ。」とカノン。

カノンは片手にマンゴーシュ（短剣）を二つ持ち、もう片方の手にブーメランを二本持った。

「そうだね。」とレアンが弾むように答えた。

レアンは右と左のポケットからマシンガンを取り出した。

レイは二人の武器を見て、目を輝かした。

そして「すごい、かっこいい・・・。」とつぶやいた。

「あ・・・。私、武器わすれちゃった。」とマナ。

「じゃあ、私たちを魔法で援護して。」とレイ。

「わかった。」とマナは後ろへ下がった。

「僕たちもやろう。兄さん。」とティラは無地のローブから左手を出し、左手に銃を取り付けた。

「うむ。」

キバは少女に特大手裏剣を投げつけた。

手裏剣は少女の腹に貫通した・・・が、貫通した後、通り過ぎて手裏剣は壁に激突してカランと音を立てて、落ちた。

「なに！」とキバは落ちた手裏剣を手にとった。

「こつちよ！」

カノンは一歩前にステップを踏み出すと、マンゴーシュを華麗に空中へと投げ、ブーメランを二本、力強く投げると、空中のマンゴーシュをきれいにキャッチして、そのまま少女に突進した。

ブーメランも同様にマンゴーシュは少女に貫通した。

そして少女は原型をなくし、木っ端微塵となった。

水は少女のいた場所に戻り、少女は再生した。

「な、なんと・・・。」とカノン。

「これじゃあ僕の技も効きそうにないね。」とレアンはマシンガンをしまい、マナに言った。

「ねえ、マナ。君の攻撃魔法、石化をしてごらんよ。」

レイはまた目を輝かせた。「え！石化！すごい。」

「わかった。でも時間かかるから、援護して。」マナは地面に石で何か描き始めた。

少女は水龍の背中をたたいた。

水龍は尾でティラをつかんだ。

ティラは手足をばたつかせて、必死に出ようとするが、ビクともしない。

水龍はティラを尾ごと壁へとたたきつけた。

水の尾は木っ端微塵に崩れて、しぶきをあげた。

ティラは顔を歪めて腹を抱えた。

口の端から血がつつと垂れた。

そのままティラは自由に動けなくなってしまった。

「ティラ！」

レイは少女をにらみつけた。

少女は平然としている。

やはり心を持たない神殿のからくりには過ぎないのだろうか。

今回もそうなのだろうか。

レイにはそうは思えなかった。

レイはそのままぼうつと考え込んだ。

それをいいことに少女は手を伸ばしてきた。

「レイ！」とレアンが一喝すると、レイは我に返った。

レアンは呪文を唱えた。

すると、地面から植物の蔓がニョキニョキと生え、少女の足をきつく縛りつけた。

少女はニヤリと微笑みを浮かべると、手でスパツと蔓を斬った。

あまりにも軽々と斬るので、レアンは悔しそうに舌打ちした。

キバは「もう！めんどい！」といって、少女に突進してそのままキバごと貫通した。キバは一瞬鍵をつかんだが、まるで鍵が生きているかのように、するりと手から抜けてしまった。

キバはそのまま転んだ。

水龍が、動きを止めた。

「どうやら力をためているようだ。」

「次！大きい技がくるよ！」とカノンは言い、お得意の怪盗技で高くジャンプすると天井に手をつけて、そのまま回転すると天井にべったりと張り付いた。

レアンも同じように壁に張り付いた。マナは魔法陣に手をつけたまま、移動できないでいた。

レイはマナの前に立ちはだかると、ティラとキバ、ミルトを呼んで、強力な結界を張った。

青い半透明の壁が、レイ達を包んだ。

水龍は木っ端微塵に水になると、大きな波になり、皆を襲った。

大きな波は渦に変わった。

結界は簡単にやぶれ、波にもみくちゃにされた。

渦巻きだった。

レイとキバとティラは簡単に流され、手足をばたつかせて溺れないように必死である。カノンとレアンはその様子を冷静に見つめている。

波はどんどん弱まると、普通の水に戻った。

ティラが水面からプカリと顔をだした。

壁に頭をぶつけたようで、気を失っている。

マナは水の中から出てこなく、そのまま魔法陣を完成させようとしていた。

水は水龍の形をつくり、もぐっていたマナの姿が見えるようになった。

キバはティラのそばへ寄って、様子をみている。

レイもすつくと立ち上がると、ぶつぶつと呪文をつぶやき、指を向けた。

そして指から放たれる雷光。

みんなはまぶしそくに目を細めた。

雷光にレイの顔が青白くうつし出された。

そして、青白い雷光は少女を貫いた。

少女の動きがしばし痙攣した。

腕が震えている。

少女は雷光にしばれたようだ。

ということは、ただの水ではないのだ。

なにかが混ざっている証拠だ。

不意にマナが叫んだ。

「みんな！どいて！」

マナは魔法陣を光らせた。

その光はレイの雷光よりもまぶしい。

マナは手に光を宿らせ、そのまま少女に手を向け、突っ走った。

水龍の尾がマナを捕らえようとするが、マナのすばやさは雷光のよ
うにすばやく、水龍の尾は虚しく空を切った。

マナは少女のところへたどり着くと、ニヤリと笑った。

そのまま右にステップを踏み、少女の攻撃をさらりと避けると少女
の顔をマナはむんずと手でつかんだ。

少女は耳を狂わせるような、叫び声を高くあげた。

少女はみるみる顔から足まで石に変わっていった。

少女は全体石になると、床に倒れ、木っ端微塵となった。

少女が石になると、水龍は体をうねらせ、叫び、苦しそうにしてい
た。

水龍の動きが止まり、こちらを見据えてから水龍はただの水へと化
した。

血しぶきの代わりに、水しぶきがあがった。

水しぶきはヒリヒリとした感触を残して、跡形もなく消えた。

ミルトは前に進み出て、皿の石くずの中から、鍵を取り出し、首へ
とかけた。

ミルトはざわざわと猫のように毛を立てた。

「どうした！？」とキバ。

グルルルル。

とミルトはのどを鳴らし始め、いきなり一まわりも二まわりもむくむくと、大きく成長した。

みんなは驚愕の顔でそれを見守っている。

さすがのレアンも口をぽかんとあけて、見ていた。

そして、口を閉じ、「ほほう。龍、鍵をもつて、成龍となる・・・か。」といった。

まったく意味がわからない。

そしてミルトは成獣となった。

この部屋はぎゅうぎゅう詰めになり、息をするのも苦しい。

ミルトが体をぐつと伸ばすと、天井の一部が崩れ落ちた。

レイは空を仰いだ。

空はまだ青い。

さて、ミルトはもう誰でも乗れるんじゃないかってほど、大きくなつてしまった。

「どうしよう。このままじゃミルトが邪魔で帰りの扉にたどり着けない・・・。」とカノンが苦しそうに言った。

レイは「ミルト、壊しちゃえ。」とレイの顔の大きさの二倍ほどの、

ミルトの耳元でささやいた。

ミルトは小さくうなずいた。

ドームにぎゅうぎゅうになっていたミルトは天井をさらに壊し、みんなをきやあきやあ言わせた。

そしてこの部屋には天井というものがなくなった。

「キバ！のるよ！」とレイはミルトにまたがった。

またがるのにも時間がかかった。なぜなら、ミルトのウエストはキバの身長ほどあるのだ。

「おう！」とキバはティラを抱えて、ミルトにのった。

「じゃあ。みんなまたいつか。」とマナが空を仰いで、言った。

「うん！じゃあね。」とレイは大きく手を振り、遠くへ行ってしまう見えなくなった。

「ちよつと」。私も乗りたいのにいゝ。」とカノン。

「じゃあ、僕たちは華ノ国に向かいますか。」とレアン

「あれ？私たちの目的は会って、情報交換することでしょう？」とカノン

「私はレイ・ホープに会えただけで満足ですよ。」とマナ。

「また！心にもないこと言っちゃって！じゃっ行こうか。」とカノン。

マナは無邪気にほほえんだ。

いや、むしろ邪気に。

3章 進歩（前書き）

天空城編、完結です・・・。
でも、ほんとの完結じゃなくて、宇宙編につづきます。

3章 進歩

三章 進歩

一 水晶姫

レイたちは風華大陸に舞い降りた。

ティラもすっかり傷が癒えて元気になった。

レイたちは風華大陸を見渡した。

ミルトに乗り、空から島を眺めたところ、島は丸くなっており、その真ん中にクリスタルタワーがそびえていた。

クリスタワーはみごとにものだった。

クリスタルタワーは六角柱の形をしていて、雲の先は見えない。

そして、ミルトが空から見上げるほど、ニョキッと空を突き抜けているのだ。

クリスタルタワーの頂上はどこにあるのだろうか。

もしかしたら、宇宙に飛び出ているかもしれない。

レイたちは今、クリスタルタワーの前に立っているのだ。

ミルトも地面に降りると、クリスタルタワーの扉に入れるように、白い服の青年に化した。

門の前には両側ズラリと十人くらいの兵士がいる。

その中の二人が声をそろえて言った。

「光の小さき龍、ミルト様御一行、ご到着デス！」

「……すごく、ていねいだね。」とティラ。

「この風華大陸では龍は自由なの。龍は尊敬されるべきものなんだって。むしろ神って言うてもいいね。……ほかにも龍がいるかもね。」とレイ。

「そうなのか！だからミルトも堂々とここで降りたってわけか。」

とキバ。

みんな口々にしゃべりながらクリスタルタワーに足を踏み入れた。

扉の向こうには女の子がほほえみを浮かべ、ちょこんと立っていた。年は十四くらいだろうか。

白い絹の服をまとい、見た目から貴族を思わせた。

黒い髪色で目も黒く光っていた。

その目はしっかりとこちらを見つめている。

女の子の隣には護衛するような女兵士が立っていた。

「この方は姫の妹、フィナ様でございます。」

「こんにちは。」とレイが言った。

「・・・こんにちは。」

「私の姉さまに会いに来たんだよね？」と女の子
ティラはぼんやりと考えた。

「貴族のような人の団体なのに、しゃべりかたは普通の子と同じだ・
・・・教育されてないのかな。」

「うん・・・そうだよ。」とレイはぎこちなく返事をした。

きつと僕と同じことを考えているのだろう。

慎重なレイの口を、フィナの無邪気さはレイをタメ口にした。

それにしても僕の兄貴は何にも気にしてないみたい。

キバはクリスタルの壁や家具を、きらきらした目で見回していた。
今にでも壁に頬をくっつけて、スリスリしそうだ。

「いつてらっしゃい。」とフィナはレイたちに手をふった。

フィナはそのまま自分の部屋に入り、入ったきり出てこなくなった。

「・・・では、案内しましょう。」

広い玄関を出て、廊下に出た。

廊下までもが透き通った色をしていて、それがどこまでも続いている。

「水晶姫様とは壁越しで話すことになります。安全のためでもありますし、……。姫は重い病気にかかっているのです。姫は今から病死してもおかしくない状態にあります。医師に診てもらったのですが……。病状は悪化するばかりで……。」

「そうですか……。」

そんな話を聞いているうちにレイたちは階段を上っていた。階段は螺旋状になっていて、上を見るとそれがどこまでも続いている。

「……で、不吉な話なんですけど、姫がお亡くなりになられたら、フィナ様が水晶姫の称号を受け取るのですか？」とティラ。

「……そういうことになりますね。」

「かわいそうだとは思いませんか？そのままどこにも行かないでクリスタルタワーに監禁されて。」

「……ティラ！」とレイ。

レイは静かに思った

「ティラも工場に監禁されていたんだ……。こんな質問するのは当たり前かもしれない。」

「いいんですよ。」と兵士はほほえむとまた話し始めた。

「私もそう思います。フィナ様の世話役として。フィナ様は早くに父様と母様を亡くしました。だから、ここを出て行っても、悔いはないと。やり残したことも。むしろあなた達の旅のお供に連れて行つてほしい。……でも、そんなこと危険です。」

「まあ、そうですね。」とレイはその話題を流すと、女兵士に見られないように、ティラに口パクでしゃべりかけた。

「この問題に深入りするな。そんなことしたら、計画が。」
ティラはこくんとうなずくと、口を閉じた。
しかしティラは思った。

「でも。」

螺旋階段を上りきると扉があり、その向こうから咳き込むような音が聞こえた。

「どうしましたか。ミルトさん。」

扉の中から透き通った声が聞こえた。

「……………」

ミルトは黙りこくっている。

ミルトはレイの方を横目でちらりと見た。

作戦の実行の仕方がわからないらしい。

「水晶姫を人質にとっても意味はないよ、ミルト。人質にするなら、
・気が引けるけど、フィナさんだよ。」

（そう。いつ、実行する？）

「明日ね。後でティラ達にも話そう。」

（今は、鍵の話でもして……………」

「そうして、よろしく。」

「水晶姫様。私は二つの神殿をまわってここまで、なぜか急成長しました。いまでは誰でも背中中にのせることができます。」

「そうですか……………」では、で

なのでしよう。私としては。」

レイはぼんやりとしていた。

水晶姫の話は長すぎて眠くなってくる。

ティラもそのようだ。

しかしミルトは話をしっかりと聞いているようだ。

そして、キバはもつとひどい。

立ちながら口からよだれをたらし、寝ている。

まさに神ワザ！！

「神殿は龍を拝む、聖なる場所です。だからこそミルトさんはここ

まで急成長できたのですよ。」

水晶姫はようやく口を閉じた。

話が終わる頃には、空は真っ赤に染まっていた。

沈もうとしている太陽はりんごのようだった。

「今日はもう暗いので休まれていつてはどうでしょう。」

「待ってました！！」とレイは心の中で叫んだ。

「よろこんで！」とレイ一同は声をそろえて言った。

レイたちに案内されたふたつの部屋はやはり、一面のクリスタルであつた。

「こつちね！僕と兄貴は！」

とティラはうれしそうにはしゃいでいる。

「うん。」

レイは二人に手招きをすると、耳元でささやいた。

「明日の作戦のことなんだけど。人質はフィナさんに決定。深夜3時に実行する。しっかり仮眠をとるときなさい。」

キバとティラはこつくりとうなずいた。

しかしティラは悲しそうな顔をしていた。

そのわけはやはり自分に似たフィナさんがかわいそうなのだろうか。
。。。

深夜二時。

レイはサイレンの音で目を覚ました。

一瞬何が起こっているかわからなかった。

レイと少女の姿をしたミルトは扉から飛び出ると、あたりを見回した。

「何が起こっているの？」

紅い光がぐるぐると回って、クリスタルに反射し、目がくらんだ。昨日の世話係の女兵士さんが呆然と突っ立っているの、何が起こっているのか聞いてみた。

しかし兵士は「・・・フィナ様が・・・。」といい、あちらへ指を刺しているだけだった。

レイはその方向へ目をやると、フィナさんが窓辺に立っていた。その表情はおびえているのか、笑っているのか、無表情なのか、わからない。

そのとなりには、ティラが立ち、そのなりには、歪な仮面をかぶったキバが立っていた。

歪な仮面は真っ黒に染まっており、金糸で洋風な装飾が施されていた。

キバが着ていた和服は真っ黒に染まった鎧となり、それどころか洋風であった。

仮面からのぞくキバの口は笑みも浮かばない、無表情だった。

キバはフィナさんを抱き上げると窓から飛び降りた。

フィナさんを心配する人たちが一斉に悲鳴を上げた。

「キバ！ティラ！」

レイはとっさに叫んだ。

しかし、叫んでも何も起こらない。

ティラはレイを見下ろし、何も言わずに窓から飛び降りた。

レイは仲間を二人も、失ってしまったのだ。

レイの頭の中にいろいろな考えが走った。

それは裏切りなのか・・・。

それは意図的なのか・・・。

それは終わりなのか・・・。

それは始まりなのか・・・。

・・・何なのだろう。

固まったレイを心配そうにミルトが様子をつかがった。

（レイ・・・やはり、これだから人間は信用ならないのだよ。
）

レイは床に座り込み、縮こまっていた。

世話係の兵士さんも心配そうに見守っている。

ミルトは考えた。

（これから罰をあたえられることはまず、ない。私の世話係として、水晶姫もレイのことは認めているのだ。罰を与えられても、殺されることはないだろう。前向きなレイなら、すぐ立ち直るはずだ。しかし、天空城の行き方はどうやって聞き出せば・・・？）

ミルトが考えている間に、レイは兵士に腕をつかまれた。

ミルトはレイに手を伸ばしたが、世話係の兵士さんに止められた。

「今からあの人は水晶姫様のところへと運ばれます。きっと、一年牢屋で暮らすはめになるでしょう。ミルト様はあの人を復活するま

で……」

「え……そんな!!!」

「水晶姫様はお怒りになられたら、きつと彼女を死刑にするでしょう。ミルト様、今はじつと我慢です。あなたはその間に、神官となつて働くことになるはずです。その間は私の言うことをしっかりとってください。彼女を死刑にするなんて、させませんから」

ミルトは一瞬だけ女兵士を前から知っているような気がした。

面影……動作……誰かに似ている。

でも、誰だろう。

言葉遣いはい何か違和感がある。

顔にも何か違和感がある。

「もしかして……あなたは……いやっ、あんたは!」
女兵士はふふふつと笑った。

そのころ、レイは。

「こんなことが起こるなんて……」

水晶姫はか細い声で言った。

「……」

レイは何も言わず固まっていた。

しかし、すこし精神的に光が見えてきた。

「そう……これは始まり。」

「あなたは龍の数少ないお世話係です。死刑にするわけにはいきませんね。しかし、行動によってそれは変わりますよ。行動といっても、クリスタルタワーの牢屋生活ですが。」

そしてレイは牢屋にぶち込まれた……

レイは笑みを浮かべた。

どうやって脱獄するか考えていないが、レイの胸からは希望が湧き

出るようだった。

私はミルトも失ってしまった。

もう、仲間はいない。

一人だ。

しかし一人ではない。

ミルトとも、キバとも、ティラとも、つながっているのだ。

また、会える。

いつか、会えるのだ。

翌日

。

レイは足音で目が覚めた。

カツカツと音をたてて、近づいてくる。

この音からして、一人のようだ。

その足音はどんどん近づいてきて、レイの前の牢屋で足を止めた。いつのまにか牢屋内は霧のようなもので包まれていた。

「誰？」

「誰だと思っ？ 当ててごらんよ。」

気の抜けたような声だった。

この声は間違いない。

「レアン！？」

「あらっ？ 意外に正解。」

とレアンは顔をのぞかせた。

「脱獄させにきたよ！ このままだと運命が狂ってしまう。君が一人になるのは計算済みだった。ミルトはカノンに任してあるから大丈夫だ。さあ、天空城へ今すぐ行つて来い！ そしてつかまれ！ そしたら、あの子たちがくるから。」

とレアンは鍵で扉を開けて、レイに方位磁石を渡した。

レイは方位磁石を眺めた。

ガラス球のような形をしていて、中には紅い矢印が窓を示している。レイは方位磁石を振ってみた。

「これ、壊れている？」

「あの子たちって？」

レアンはレイを無視して話を続けた。

「その方位磁石は天空城を示すものだ。そして、俺がつくったものだ。」

とにんまりと笑った。

「君って何者なの？」

「神様だよ。運命の神様。ふふふ。」

「うそ。」

とレイは言つと窓を開けた。

冷たい風が頬に当たる。

銀色の髪が風になびいた。

「よく、わからないけどありがとう。」

レイはそのまま天空城に向かって走り出した。

「ちゃんと敵につかまれよ！」とレアン

「よくわからないけど・・・まあ、つかまったらつかまった。でも、つかまる気はない！」

レアンはレイを適当に見送ると霧と一緒に消えていった。

「さあ、おもしろくなってきた。」

レイはかなりの道のりを進んだ。
山を三つ越え、町も五つ越えた。

今、場所がわからず、草原に一人ぼつんと立っていた。
レイは方位磁石をのぞいてみた。

こわれたか。
上をさしている。

上をみても曇った空が見えるだけだった。
何も無い。

レイは疲れ果てて、その場に寝転がった。
空を見ていると曇天でも心が落ち着いた。

「!？」

今、何かが空で光った。
気のせいだろうか。

いや、気のせいではない。

殺意むき出しでこちらへと落ちてくる。

レイは立ち上がり、剣を手にとった。

その目に見える光る物は地面に着陸すると、こちらをにらみつけた。黒いフードで表情はわからない、しかし動作は魂のない人形のようなだった。

その男は言った。

「お前は、負ける。」

「天空城の人？ 負けないよ！」

男は鼻で笑った。

男は音の速さといってもいいほどの速さでいつのまにか、レイの目の前にいた。

「ひい!!」

レイは思わず悲鳴を上げた。

レイは男に殴られ、一発で倒れた。

「・・・・・・・・。」

男はレイを担ぎ、地面から浮かび上がった。

そして、そのまま上へ上へと上っていった。

雲をつきぬけ、晴れ渡る空に出た。

空には城。

城というよりは空飛ぶ船艦だった。

空の海を悠々と泳ぐ、船そのもの。

船といってもいままでに見たこともないほど大きく、戦争のために

ある船のようだった。

男、ギームは船に着陸すると、マナが笑顔で待っていた。いつもの秘書がマナに付き添っている。

「おかえり。ギーム。さあ、レイ君を牢屋に閉じ込めてくれ。」
「了解。」

と一言だけ言うとギームは牢屋にレイを連れて行った。

牢屋はこの船の一番下の階にあった。

龍やら月族やらがうじゃうじゃ収容されているところだ。

しかし、月族はもう全員死刑となった。

今では一匹の龍だけが収容されている。

光の龍、ユーンである。

ギームはユーンの向かい側の牢屋を開けると、レイを入れ、鍵を閉めた。

「……………」

「この男の妹か。」

翌日。

レイは目が覚めた。

牢の中だ。

レアンに言われたことをやりきった。

しかし、彼は味方なのだろうか。

・・・これ以上考えないようにしよう。

向かい側の牢屋からは獣の息遣いか聞こえた。
何が収容されているのかは、なぞである。

しかし、何か威圧感が感じられた。

数時間後。

向かい側の人は寝てしまったのだろうかいびきが聞こえた。

いつ助けがくるのだろうか？

あの子たちとは何者なのだろうか。

レイは虚空を見つめた。

希望は まだ 消えていない。

天空城編 完

4章 魔導童話

宇宙編

登場人物

リク・フラン
銀色。

黒髪の好奇心旺盛な六歳の男の子。目が

ロボ
か、平和主義。

少女型戦闘用ロボット。ねじが一本外れているの

白に近い金髪で、リクのお姉さんのような存在。

目が淡い青。

レアン

年齢不詳の男。

カノン

年齢不詳の女。

レイ・ホープ

絵本の主人公。

ティラ

闇を創ったモノ。

キバ

暗黒騎士。洗脳されている。

ミルト

光の大龍。

マナ

リクに優しい正体不明の子。

リム

マナの親友。

ヴァッシュ

龍騎士の男。

闇

ティラの怪物。

ギーム

闇の溶媒。

銀髪の少女が死んで989年後。

技術は大幅に進歩し、人々は宇宙に侵略の手をのばした。世界は決して平和ではなく、国の域を広めるために宇宙戦争が始まっていた。

その戦争は決して血は流れることはなかった。しかし

ロボットがぶつかり合う見苦しい戦争であった。

歴史が狂っている。

その混沌の中 一人の男の子が救世主として、立ち上がった。

四章 魔導童話

私は大図書館で真新しい本を見つけました。
紅い表紙に龍の絵が描かれていて、とても興味のわく本です。

昔、昔、あるところに 銀色の少女がいました。

その少女は美しくも、穢れた月族の子でありました。

忍者と少年と龍を引き連れ、旅に出た少女は水晶姫という怪物のよ
うな女に出会い、

少年と忍者に悲しくも裏切られました・・・。

彼女は水晶牢に入れられ、嘆き悲しんだ。

「なぜ、こんなに暗いの？」

「なぜ、あかるい世界は月だけに暗いの？・・・冷たいの？」

その暗い中、運命の神にてをさしのべられ、彼女は救われました。

「あなたがここで死んだら、破滅の道へと進むですよ。」

「さあ、立ちなさい。戦って勝つのですよ！」

彼女は怒りと復讐に燃え、闇という怪物と戦いました。

華麗に戦うも、無残に散りました。

彼女はひとりで孤独でした。

だからこそ、彼女は死んでしまった。

彼女に仲間がいれば、この錆びた世界はないのかもしれない。

銀色の光は赤黒く染まり、光は消えました。

こうして魔導というものは、闇の腹の中へと消えましたとさ。

めでたし、めでたし。

あれ・・・？

私は本の最後にはさんである、メモをみつけました！

・・・何も書いていませんね。

あ！わかりました！

暗くすると、文字が浮き出るのですね？

なにになに・・・？

これは現実にあつた話です。

だれか、この銀色の少女を助けてあげてください。

助けるのなら、僕のどこに来てね！

本を読んで、

9 8 9 0 0 4 7 3 1 .

そうすれば、静かに道は降りるでしょう。

猿でもわかるはずですよ！

一刻も早く来て！

私は猿以下ということですね。

この暗号はなんて意味なんでしょう・・・？

あれ！？最後になんか書いてありますね・・・。

作　　レアン兄妹

レアン兄妹ってだれ・・・？

こんなに真新しい本なら生きているはずですよね。

ふむふむ。

暗号の意味もわかつちやいました。

さすが私の電子脳。

そう。私は　ただ一人の　意志と心を持った、ロボット。

4章 魔導童話（後書き）

ここからまた新しい話が始まります。

5章 宇宙のハザマ Part 1

五章 宇宙のハザマ

一 出航

暖炉の炎がパチパチと音をたてて、燃えている。

リクはふかふかのソファに座り、のんびりと昼寝を楽しんでいた。ひぎの上には大好きな本がどっしりとのっていた。

題名は魔導があつた国。

男の子が奪われた魔導を取り戻すために旅に出る話だった。

リクはSFやファンタジーが大好きだった。

リクは本を読んで、タイムトラベルやロボットというものに興味を持っていた。

ロボットというものはもうとつくに完成されていて、戦場で活躍しているが、タイムトラベルマシンというものは開発されてはいるが、まだ一回も実験に成功したことはないという。

「リクー！本を返さなきゃいけないんじゃないの？」

母の声が耳の中に入ってきた。

耳障りだけど、本は返さなきゃ。

リクはぼんやりと目をこすって、返事をした。

「わかつてるよー。いつてくるね。」

「いつてらっしゃい。」

リクは黄色いリュックを背負って、緑色の表紙の本を抱えて外へと出た。

外は一面の青い空であつた。

しかしそれは幻にすぎない。

本の中で青空というものが書かれていたけれど、リクは本物を知らなかった。

いつか宇宙船に乗って、地球に降り立ち本物の青空をみるのがリクの夢だった。

この宇宙都市では人間でも息ができるようにと、円形型で透明のドームが張られていた。

ドームでは朝と昼に青空や曇り、雨、雪、などの天気を映し出した。夜は透明のまま宇宙の空や星が見られた。

リクは公園を突っ切って、大図書館についた。

大図書館は本ならなんでもそろっていて、ない本はないような図書館であつた。

しかし、大図書館の中は迷路のように入り組んでいてなかなかでられなかった。

この図書館は子供達の間で「不思議の大迷宮」と呼ばれていた。

理由は僕が飼っていた電子ペットのソウルとはぐれて、そのまま帰ってこないからだ。ちなみに、ソウルという名前は形からそのままだ。

「よし、今日は歴史本でも借りようかな。」

リクは自動ドアの前に立った。

「・・・・・・・・。」

開かない。

今度はじたばたしてみた。

「・・・・・・・・。」

やはり、開かない。

リクは背が低く、感知してくれないらしい。

「あら？坊ちゃん、どうしたの？」

つばつきの帽子を深くかぶった、女の人が声をかけてきた。

その女の人は自分の顔を他人に見せないようにして、帽子をかぶっているようだった。しかし、まったく悪い人には見えない。

帽子からはみでている、髪の毛は目立つきれいな金髪だった。

「……あつ、すみません。なんでもないんです。」

自動ドアが開いたので、さっさと行こうとしたら、女の方はリクの手を逃がさないようにつかんだ。

「そう、いそがないでよ。坊ちゃんは冒険ものの本、好きかしら？」

リクは目を輝かせて返事をした。

「はい！誰よりも好きです！」

「……（ニヤリ）。面白い本があるんだけど、一緒にみない？」

「いいんですか！？」

リクはそのまま女の人について行って、魔導絵本コーナーのずっとずーっと奥深くまできてしまった。

そして、女の方はある本棚の前で止まった。

怪しげな絵本がずらりと天井までならんでいる。

リクはひとつの本を手にとって、ひらいてみた。

「989」

そこには、銀色の少女の絵が描かれていた。

少女の目はリクの目と同じように銀色であった。

挿絵であるのに、銀色の少女の目からは半端ではない光にみちいて、きれいであった。

しかし最後の絵は

血にまみれた少女の絵が描かれていたのだ。

「ひい！」

リクは急いで本を本棚へと戻した。

「その少女は私のともだちな。彼女を助けるためにはどうしても、子供二人が必要だったわ……。坊ちゃんは協力してくれる？」

「はい……。しかし、内容によって……。」

「いいの！？ありがとー！」

「。。。。。」

この人、聞いていないみたい。

まあ、やってみよう。

「でも、昔の人のことどうやって助けるんですか。」

「。。。。。。誰にも、今からやることはいわないでね。」

「。。。。。。はい。」

やっぱり、聞いてない。

女の人は白くてほっそりとした長い指を

「989」と書いてある、さっきの本を本棚に押し込んだ。

本はカチャリと音をたてて、何かのスイッチのようにめりこんだ。

僕は口をぱっくりとあけた。

本棚がずるずると左へとずれて、入り口ができたのだ。

女の人にはリクに一礼して、帽子をとった。

彼女の目は血のような真紅色の目であった。

「申し遅れましたが、わたくしの名前は カノン と言います。」

「ぼくはリク。リク・フランといいます。」

「よろしくね。」

とカノンはにつこりとわらった。

リクにはそれがとても輝いて見えた。

「レアン！！入るよ！新入りだよ！！」

「おお！それはそれは。」

えらく気の抜けた声が聞こえた。

「あらら、銀色の目のお子さんだね。・・・似てるね。」

レアンという男は、金髪に真っ赤な血の色の目を持っていた。

レアンは優しそうに見えたが、目には鋭い光が宿っていた。

「ほら、君のお友達でしょ？」

部屋の中から、ててててつという足音が聞こえた。

見覚えのある青い光がリクに飛びついてきた。

「きゅ、きゅ。」

「ソウル！！どこ行ってたんだよあ！もう！」

リクはソウルをぎゅっと抱きしめた。

ソウルはうれしそうにしつぽをふった。

「帰ったらなにか食べような。」

「きゅ。」

「・・・・感動の再開ってところかな？」とカノン。

「さあ、見つかる前に速く入って。」

レアンはリクの背中を押して、無理やり入れた。

「こんにちは。私の名前は口ボ。」

真っ白な女の子がこちらに顔を向けた。

「・・・・。」

リクは女の子に見とれてしまった。

彼女をずっと、ずっと前から知っているような気がしたからだ。

「不思議ですね。あなたを見ていると、久しぶりの感覚がします。」

「うん・・・・。ばくもそう思った。」

「んふふ。それはね？・・・・まあ、いつかわかる日がくるよ。」

とレアンが怪しげな笑い声をたてた。

「さあ。ぼくの計画をたつぷり聞かせてあげるよ。でも、これは誰にもいってはいけない。どんなに親しい人でもだ。」とレアンは真顔で話した。

「お母さんでもだよね。わかりました。ぼくけっこう口はかたいほうだから。」

「いいこだね。」

優しいそうな台詞とは裏腹に、目はとても真剣であった。

そんなに銀色の少女はたくさんの人に愛されていたのか。

リクはとてもそのこに会いたくなかった。

リクはロボットのとなりに座ると、カノンはレアンの隣に座った。

「君達、タイム・トリップ・マシンというものを知っているかい？」

「うん。よく、小説にでてくるもん。」

「わたしのお気に入りデータに保存されています。」

「実はぼく、それを開発してしまったんだ。リク君には悪いけど、ソウル君で実験済みなんだ。」

レアンが言う「開発した。」は「盗んだ。」に等しい……。

「ええ！！ソウルが！（でも……無事でよかった。）」

「タイムマシン使っちゃだめ！って法律に書いてあるけど、ここでは大丈夫。誰もこのことは知らないからね。しかも、この図書館を造った人もグルだ。」

そして、君たちにぼくが設定した時代へ行ってほしいんだ。だめかな？」

「唐突に言われても……ねえ？ロボさん。」

「いいえ。私は行くわ。一人でも、行く。」

「ええ！！そんなあ。」

そういつているうちに、カノンに手首をつかまれ、連行されていた。いつのまにか、真っ暗な部屋にでた。

その部屋の中でレアンの声が響く。

「君達にやってほしいこと。それは、牢獄に入っている銀色の少女を脱出させること。ただ、それだけ。牢獄の檻はロボが破壊してくれるはずだから。破壊したら、すぐ帰って来い。操作は全部ロボが運転するから、いじるなよ！」

電気がいきなりついた。

目の前には白衣を着た、科学者がわらわらいて、リクはびびった。ひとりの科学者が大声をあげた。

わらわらしていた、科学者が分散すると、目の前には「豪華で壮大な」とはいえない、「貧相で小さい」ロケットがあった。

「タイムマシン、出発準備！」

すると科学者はわけのわからない機械の前に座り、いろいろなキーボードをいじくりまわした。

天井がゆっくりと開く。

（こんな公な場所でやっていたらばれるんじゃないか。）

とリクは不安になった。

「さあ、速く乗れ！」

レアンに背中を押されて、リクはロケットそのままの形をした、タイムマシンに乗り込んだ。

ソウルは興奮した様子で、リクの頭の上ではねをパタパタさせている。

グイイイイイイイン。

パソコンを起動させたような音が轟音となり、響く。

「ベルトをしめて。」とロボ。

リクはいそいでシートベルトをしめた。

ロボは方耳にイヤホンをつけた。

「準備完了です。」

「わかりました」。じゃあ、カウントダウン。」

5
4
3
2
1
0.....。

ものすごい轟音が続いた。

出発したのだ。

船内はぐらぐらとゆれ、リクは気持ち悪くなってきた。

「うう……。」

「あ、そうだ。あなたは素人だったか。ちょっとの辛抱です。大気圏をぬければ、素人でもダイジョウブなシステムですから。」

そしてこのまま、ひとつの「貧相で小さい」ロケットは宇宙へと飛び出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8184/>

Sky Soul

2010年10月10日05時42分発行